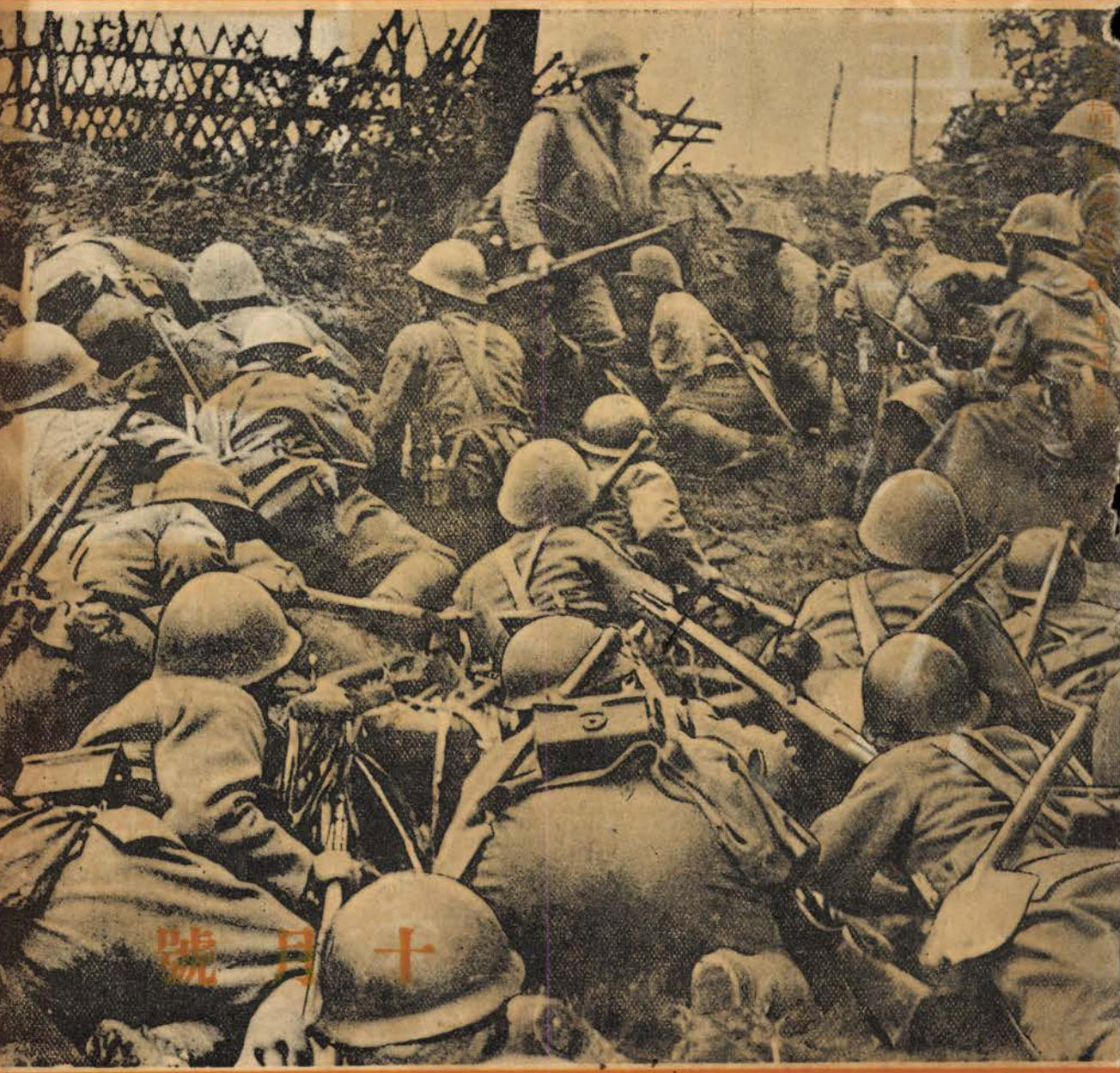
麻生路郎★主宰

法の雑柳川



十月號

Pensoj flugas trans la land-limon

十月の句會

★十月四日(土)午後六時
★御津八幡宮(電話南八六四〇)

南區八幡町佐野屋橋筋角
(木綿橋電停下車東一丁
八幡町市バス停西一丁)

兼題「屋　號」麻生路郎選
「博　士」北川春巣選

講話「前句附の話」麻生路郎

會費 三〇錢

呈賞 席題天位(各題)に粗品を贈る

主催 **川柳雜誌社**
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
電話土佐堀 三三番 八六番 八一六四番

(本社の句會は毎月第一土曜)

敬神崇祖

伊勢大神宮、熱田神宮、橿原神宮、神武天皇御陵 をはじめ奉り數多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社(上・中・下社)、談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある參拜路であります

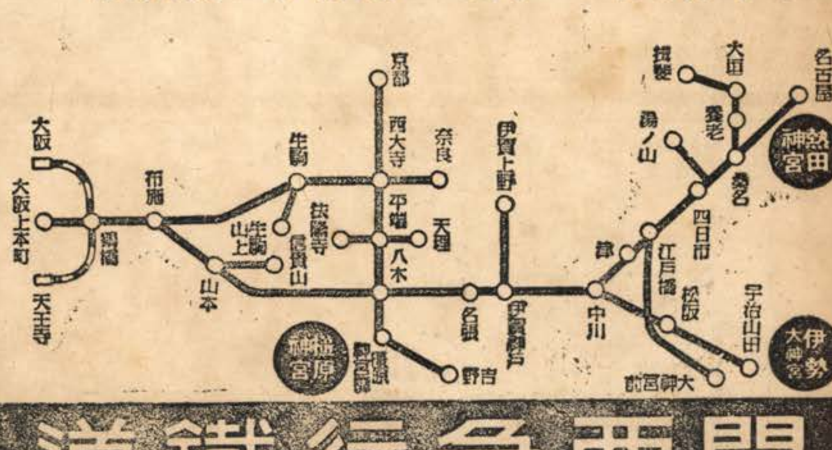
心身錬成

神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りては吉野朝幾多盡忠の史蹟、奈良、吉野、多武峯、室生寺、赤目四十八瀧、香落溪、養老等の名勝に一般向鍛錬道場としてのハイキングコースがあります

信貴生駒縱走、 枚岡公園—生駒山上 **攝河泉展望コース、平城史蹟めぐり、飛鳥史蹟めぐり、多武峯より石舞台・岡寺へ、三輪より石上神宮・天理へ、赤目四十八瀧より香落溪へ、その他奈良、吉野、生駒山脈を中心として數多くの優秀コースがあります**

重要交通路

大軌と參急電鐵とが合併して全營業路線に四三八粁、これに直營バス及傍系の電車バスを加ふる時は一千粁を超え、大阪奈良三重愛知岐阜の一府四縣に跨り交通產業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



關西急行鐵道
(旧名 大軌參急電鐵)

==苦笑と哄笑==
==で人生勉强==

麻生路郎著

新川柳評釋

★定價八十錢(送料)六錢
・海外註文は送料實費加算を乞ふ

★どのページから讀んでもよい。面白いから引づられて讀む。讀み了つたら、川柳の味が判るといふ本である。

藤村誠一氏著

隨想集

詩人複眼

序 麻生路郎
序 百田宗治
跋 吉川則比古
裝幀 田村孝之介

定價壹圓(送費六錢)

★高鷲亞鈍が著者のペンネームだと云へば本誌讀者にはこの本が持つ魅力を想像することが出來やう。

川柳漫畫

累卵の遊び

麻生路郎著 柴谷柴卅畫

★特價 八十錢(送料)九錢

堺市出島海岸通二丁一八二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

鐵兜

鐵兜神武のむかしむかしから　豆秋

月光へ扇々と征く鐵兜　夜王

無事な日は馬の背にあり鐵兜　アート

鐵兜じり〳〵とにじり行く　石鹿

鐵兜カメラの前をかけぬける　紫香

鐵兜の庇のお守汗に濡れ　白柳子

鐵兜髭のないのが私です　春巣

太陽の直射のなかの鐵兜　鮎美

鐵兜の下は白鉢巻の意氣　普天

（九月十九日不朽洞會委員會にて）

學歷

學歷があるので馬鹿になり切れず　夜王

敬遠はその學歷が知れてから　史路

常會でその學歷をうたがはれ　白柳子

學歷を持たぬが社長自慢なり　籌彦

學歷があるとは見えぬ服を着る　小松園

學歷の無いのを親の罪に着せ　史風

大學を出たとは言へぬ文字を書き　波夢造

學歷があつて養子を言ひ寄られ　紅多呂

學歷がなんにもならぬ特務兵　豆秋

法科出も何の要なき部屋住まひ　馥乃

學歷を言うておいとけぼりをくひ　鮎美

學歷にあつさり負けて引きさがり　柳太

美まれる程の學歷でもないよ　恒明

女房に學歷がありへこまされ　同

大學を出て而人（アキンド）に使はれる　玲之介

學歷が足らぬで養子斷られ　同

學歷の役立つ時が來たと言ふ　一笑

學歷の話にふれてだまり込み　同

學歷を訊かず握手をして吳れる　瀟湘

學歷を女はうはの空で聞き　同

大學を出た長男は遊んで居　石鹿

インテリ藝妓と呼ばれて字の哀はれ　同

非常時へとんな學歷役に立ち　自有涙

村立の田圃の中の學歷で　同

學歷があればこそたるお家柄　寄與史

履歷書へやつぱり俺は尋卒か　同

學歷と別に藥で儲けてゐ　某人

學歷へ親爺の脛の匂ひがし　同

學歷と別に車掌からされ　紫香

女子大を出たとも見えず子を背負ひ　同

滿洲へ來ても學歷物を言ひ　春巣

學歷を問はれアハハと笑うとき　同

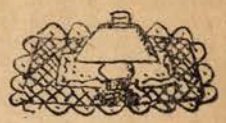
（八月十日不朽洞會總會にて）

清水白柳子（句）　麻生路郎（書）　柴谷宰二郎（畵）
廣瀨一陽（カメカ）の四氏合作。

〝鐵兜〟と〝學歷〟

川柳雜誌　十月號目次

表紙……（鐵兜）……
川柳窩眞……八歩・哲……（一）
「鐵兜」と「學歷」（不朽洞會より）……（一）
川柳戰線名句評釋……麻生路郎……（二）
奇緣同稱記……森東魚……（二）
四人は語る（前號寫生句の事など）……路郎・丹路……（四）　某人・弧鈍……（四）
川柳解題と例句……麻生路郎……（二）
武玉川四篇研究（三）……梅本塵山　森蛙子　東魚　省二……（三）
獨逸語譯四句……不識老人……（三四）
本因坊の風貌……福田山雨樓……（三六）
吟行地調べ　奈良篇（八）……麻生路郎……（四）
銀波樓氏を迎ふ……安川久留美……（三五）
呑まれの遍路……前田五鬼……（三六）
籠の中の花……濱田久米雄……（三六）
川柳世界史（八）……戶田孤蓬……（三）
興亞號飛ぶ……鈴木九坡……（三七）
川柳お隣組のための脚本　柳劇　みやうが宿（一場）……小畑白有涙……（三〇）
★
近作柳樽……麻生路郎選……（三七）
川柳塔……麻生路郎選……（六）
同舟近詠……諸家……（三四）
一路集……滿員……岩崎柳路選……（三八）
空場……須崎豆秋選……（三八）
各地柳壇……（三〇）
川・協ページ……（三六）　柳界展望……（三五）
後記……（三五）　社關係の人々……（三六）



川柳 解題と例句

=路郎編=

(17) ピンポン

◆ピンポンはロンテニスの小規模なもので卓上で行ふ室内の球技である。

◆卓球（ピンポン）の起源は西暦一八七〇年頃、イギリスの王侯貴族や上流社會の人達がセルロイドの球で戲れたのがはじめである。

◆卓球はケンブリッヂ大學のゼイムス・ギブといふ人が創始したのだと云はれてゐるが、その頃はピンポンといふ名稱でなくゴーシマとか、テーブル・テニスとか呼んでゐた。それはロンテニスの縮圖として生れ卓上で行ふからである。

◆そのテーブル・テニスをどうしてピンポン Ping-pong と呼ぶやうになつたかと云へばその當時イギリスで使用してゐたバットは現在日本で使つてゐるやうな木製のものでなく、木製の枠に羊皮を張り、セルロイド球を打つた時にピンと音がし、相手方の卓に彈む音がポンと耳に響いたので、その響をとつてピンポンと命名したのだと云はれてゐる。

◆日本に輸入されたのは明治三十二三年頃である。

◆支那ではピンポンを乒乓と書

川柳 戰線名句評釋

麻生路郎

聖戰に死生の間を往來した人たちの句を拾ひ蒐めて評釋を試みた。作者は何れも不朽洞會員である。

共々に明日は散る身のかくし藝　美知夫

含蓄のある句だ。惻々として身に迫まるものを感ずる。戰線句としての上乘。

情景はニュース映畫や一土と兵隊一の映畫などで親しく觀てゐられるから、詳しい說明は省くが、下五の「かくし藝」が、箸で飯盒を叩いて、浪花節を唸つたり、佐渡おけさを唄つたりしてゐる朗景を髣髴たらしめてゐるではないか。

しかも、この朗景こそは一共々に明日は散る身の一悲壯なる朗景なのである。召された日、既に覺悟は出來てゐたに違ひない。元より生還は期してゐなかつたであらう。その日がいよ〳〵明日に迫つたのである。それを一つの朗景として描出したところに軍人訓が飛躍してゐる。「共々に」の上五の措字の巧妙さも見落してはならない。

稻光り敵も味方も浮出され　美知夫

第一線の寫生句だ。凄絶な情景を想はされる。一瞬の蒼白き、戰陣に戰機の切迫を感ずる。

陣中閑手相骨相字劃など　沒食子

面白い句だ。陣中のスナツプだ。弓の弦はいつも張り切つてはゐない。

戰ひの前の靜けさが巧みに描出されてゐる。陣中に手相や骨相などが云々されてゐるのも面白い。戰場にあつて戰爭を忘れてゐるやうな餘裕綽々たるところに一脈のユーモアが流れてゐる。

日本の水が一杯だけの慾　宵明

眞實の叫びほど強いものはない。技巧も何も要らぬ、單純ではあるが、こころのまことを其のまま投げ出したところにこの句のいのちがある。「日本の水」と云つたところに多少のヤマがあると云へば云へないこともない。

支那と惡水。兵隊と渴と水實際支那の土を踏んだ人でなければ想像もつかないであらう。「一杯だけの慾」は決して誇張でも何んでもないのである。

宣撫治療ヨハネ馬太傳など思ひ　沒食子

聖戰は良民との闘ひではない。そこに宣撫治療の眞生命がある。

マタイ・マコ・ルカ・ヨハネの四福音書には、キリストが、多くの者の病を癒やした實證が到るところに說かれてある。宣撫治療は神の仕事だ。斯うした句も戰線を駈けめぐつた人でなければ詠めない句だ。

戰爭に敗けてアイウエオも覺え　白峯

穿ちの句だ。抗日の愚を知つた人たちの間に一寸刻みにアイウエオが浸潤してゆく。握手の第一線は文字を知ることである。言葉が話されることである。

行き違ふ部隊も負けぬ汗をかき　美知夫

夕立に遇つたやうに、全身汗まみれだ。いくら同情しても同情しきれるものではない。「行き違ふ部隊も」こちらに負けないほど、ポタリポタリと汗を落してゐるのを見た作者は同情の眼を投げながらもニヤリとしたのである。客觀描寫の句だ。この作者には汗と兵隊を詠んだ句が二十句近くある。その二三を紹介しておこう。「大汗に讓つてくれる風呂の順」「一寸待てと軍醫も汗をふき給ふ」「子の寫眞汗に濡れてるまま笑ひ」。

落伍即、死なり賴るは水と脚　沒食子

落伍することは自ら死を撰むことだといふ強い信念が、小休止では足の手入れ、殘りすくなの水への心づかひが、偲ばれて一讀涙ぐましいもの

く。これは言葉の洒落で日本で只をロハといふのと同じだ。兵はピンである。その兵が彈に當つて足がピンととれ、ポンととれたのである。

モンペイの慰問ピンポン臺をふき　耕水
チヨカ〳〵としてピンポンが強いなり　春巣
ピンポン臺海にもあきた顏ばかり　みづほ

(18) チップ

◆チップとは心附けのことである。英語のチップ tip といふ言葉は肉を横取するといふ意味があるそうだ。語源は昔ロンドンの或る肉屋のロースト・ビーフが非常にうまくて有名となり、食事時には店内に溢れるほどの人が來た。そこで註文して早く食べるためには幾らかの金を與へることが考へられた。即ち to insure promptness のためであるといふところから、その頭字を三つ合せて tip といふ名詞が生れたのだそうだ。

◆日本でチップといふ言葉が一般に用ひられるやうになつたのはカフエーが出來てからしい。

◆喫茶店の擡頭と共に、カフエーの寂びれるのを防ぐためカフエーではお客吸收策として、午後から五時位までをノーチップ時間とする制度が生れた。

うぶとれすちつぶを貰ふ握手をし　隣帖
午前二時チップ忘れて歸へられる　豆秋
ノーチップトランクすつと提げて出る　八合

があある。犬死はしたくないといふ、切實な兵隊心理が、うかがはれる句だ。この句は一落伍そく、死なり一と訓むことに留意されたい。

緊張をせよと歩哨に蚊がとまる

美知夫

歩哨任務の重大なことはいふまでもないが、かなり長時間を肉體的な束縛の下に歩哨することは、事が無ければ無いで一層睡眠を催すだらうことは想像に難くない。歩哨にとつて睡眠は敵である。そこに歩哨の緊張が又してもみだれやうとするのを僅に一疋の蚊によつて緊張させやうとするところは面白い。

實際歩哨に立つた經驗のある作者としては案外樂々と見つけた句境ではあらうが、この一疋の蚊を歩哨との配合に動きのない句として構成した手腕は作者の川柳的な炯眼だと云はねばなるまい。

廣東の街で右向け左向け

白峯

遠く廣東まで來て、街路上で右向け左り向けをやつてゐることは、なんとなくそぐはないものがあつて骸肉の歎にたえぬものがあらう。

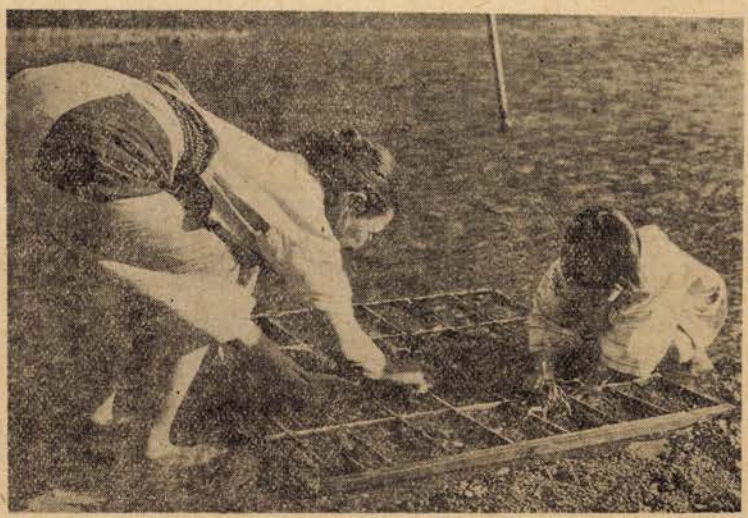
既に廣東の敵は四散したが、敵の逆襲にそなへるとともに、市街の治安にあたつてゐるやうな感じを一右向け左向け一からうけとることが出來る。內地にゐては作れない句である。

激戰をけろり忘れてシヤツ洗ふ

宵明

頑敵が算を亂して敗走したので、さしもの激戰も屏息した。

陽が強く照りつける。碧い空が顏を出した兵隊は昨日までの激戰をけろりと忘れてしまつたやうに、その邊りの小川でシヤツを洗つて木の枝などに引つかけておく。魚を釣つたりしてゐるひまにシヤツが乾く。乾いたら、それを着て營舍に歸へる。そうした風景を巧みにとらえてゐる。



哲井福ラメカ　したなため穴も張替へむしり取り（八歩）

彈道低し噛みつく

沒食子

一彈道低し一で距離感を力強く表現し一噛みつくやうに伏せの聲一で、間髪を入れず味方の狀勢を躍動させてゐる。この句の場合、一噛みつく樣に一の中七の措字は殊に剴切で一兵たりとも無駄に消耗したくない指揮者の心情がこの七音字に鏤刻された感がある。

伏せの聲

敵のゐる森は杏の花ざかり

宵明

あの殺風景な戰線で斯うした美しい情景が眼に映つる作者はたしかに詩人である。豚の鳴き聲さへ情趣をそへるやうに思はれる。一敵のゐる森は一と戰意を強く出してゐながら次ぎに一杏の花ざかり一と鮮やかに轉換して自然の美を賞揚する其の微妙な働きを見逃がしてはならない。戰線句として、これほどに詩情の出てゐる句は稀れである。

婚禮樂だんがと炊事茄子を切り

沒食子

はじめて支那風俗に接したものはことごとに珍らしい。どこの街でも變な行列がよく通る。そして變な音樂が響いて來る。何が何だか判らない炊事當番はもう支那に馴れてゐる。アレは一婚禮樂だんがと云ひ〳〵茄子を切つてゐるといふのである。この場合の大阪辯も一寸面白い。街にある營舍風景を詠んだ句であらう。

着劍で覗けば豚が二三匹

宵明

村落への追擊であらう。

一着劍で覗けば一で勢ひ込んだ兵士の姿が眼に浮んで來る。ところが一豚が二三匹一では拍子抜けがしたのに違ひない。戰線風景を巧みに描出した句だ。

四人は語る

前號寫生句の事など

路郎・丹路
某人・亞鈍

朝の驛ぞろ〳〵ぞろ〳〵ぞろ〳〵　岡田某人

路郎＝この句は一寸面白いね。

丹路＝朝の驛ぞろ〳〵ぞろ〳〵ぞろ〳〵（早口で）

路郎＝駄目々々。そう朗詠んではいかん。〃朝の驛ぞろ〳〵ぞろ〳〵〃で句切つて〃ぞろ〳〵ぞろ〳〵〃と押出すんだ。

丹路＝〃朝の驛ぞろ〳〵ぞろ〳〵ぞろ〳〵ぞろ〳〵〃

路郎＝ハヽヽ。〃ぞろ〳〵〃が多いぢやないか。（哄笑）

丹路＝ア、そうか。八つやな。（苦笑）しかし先生、これに直接ぶつかつて出た句は、自然に力があるといふことである。

句としては變哲もないやうであるが、ぢつと嚙みしめるといゝ味がにじみ出て來る。そして何等無駄がない。さういふ點で面白いと思ふ。併し初心の人が眞似をやつたからと言つても、斯うはいかぬ。眞似は避けて欲しい。つまり直接自然をとらへて作るといふことを此の句から學んで貰ひたい。型を直似ずにこゝろを學んで貰ひたい。

丹路＝句をつくる時の心構へとしては、一遍川柳を忘れる必要がある。つまり概念化されたものが句になつて出てくると、讀者に何等反響を與へないからである。一旦白紙にもどると、句が飛躍して佳いものが作れる。だから

お日様わたしや朝顔にて候　飯尾寄與史

といふ句も佳い句だと思ふ。朝顔といふ季語はあるんですね。この句は朝顔に飛込んで言つてゐる。これも寫生の變つたやり方と思へるんですが。

某人＝そやね。寫生だね。それをもつて何を訴へやうとか、教へやうとか、知らせやうとかを抜きにしてゐる句だ宙で誦むと間違ひますよ。

路郎＝しかし、寫生でこれ位巧くは詠めないものだよ。此の句は朝の驛の氣分をよく出してゐる。ぞろ〳〵出てきたその人たちの中には朝が早すぎるので、驛でミルクなどを呑んで時間を潰して出て來る人たちもゐるだろうし、電報で驚ろいてやつて來た人たちもゐるだらう。そりやもう種々雜多な人たちがゐるからね。全く〃ぞろ〳〵〃がよく利いてゐるよ。此の句から言ひたいことは、川柳といふものは、こんなものだといふ一月と言へば秋の月、秋の月と言へば悲しいものだといふ概念から離れてその實見といふか、純寫生といふか、そのものね。作者自身が朝顔になり切つた、鳥渡口では說明しにくいね……。

路郎＝この句は、純寫生ではない。感想を語つてゐるから一。

某人＝その語つてゐる感想といふものは、他に言へない言葉じやないのですか。他に飜釋の出來ない感想なり、感情。結局この句についてではなしに一般に言へるのですが、一般に川柳といへば世態人情を取扱ふものと、大雜把に考へてゐるけれども、眞に川柳に徹した人にかゝれば、どんなものでも川柳になる。繪描きは風景を繪の如く見るそれも、同じものを見ても日本畫風に、洋畫を描く人は洋畫風に見るカメラマンはセルロイドの膜に寫る明暗と見るし、俳人は俳句と見る。結局見てゐるものは同じでも、作者が眞に川柳とは如何なるものであるかを、體得してゐる限りに於いては如何なる素材も川柳になると考へられる。

丹路＝……何んだ、結んでしまつたのか。それではもう何も言へん。

ユタ〳〵と廻つてベルト事がたり　多田市多樓

某人＝これも寫生といふて言へないことはない。

路郎＝併し〃事がたり〃はその人の主觀を語つてゐるわけであるから、この句も純寫生句とは言へない。

某人＝理智なり、主觀といふものが、この句の程度に出てゐる場合は目障りにはならない。理智とか主觀は一應必要ではあるが、理智なり主觀なり、それ自身が川柳であると考へ違ひして、一生懸命句の中で理窟を言つたり、肩肘張つて意氣込んでゐるといふのはどうでせうか。

路郎＝無暗に理窟を言つては、幾ら川柳でもいかんね。勿論川柳は俳句と違つて、ある程度の理智はゆるされるが鼻につく程理智を振り廻はされてはたまらない。茲に、一寸見ると寫生のやうで、寫生でない句があるから、例を擧げて見る。清水史路君の句で

あるときは地上掃射のよにとんぼ　清水　史路

僕は此の句を見ると、寫生吟といふよりも、作者の童心といふものを、此の句から味はされる。だから、蜻蛉を見て飛行機を思ひ、飛行機を見て、地上掃射を頻りに想像するといふ點から、この句は一寸見ると寫生吟のやうであるが、深く觀察すると寫生吟で

はない。

これと、同じで、市多樓君のベルトの句も純寫生吟ではない。句としてはいゝ句だ。殊に〃ユタ〳〵〃で、ベルトの廻轉してゐるさまが眼に見えるやうに表現されてゐる。寧ろ擬人法に近い句だ。

亞鈍＝風景とか自然でなしに、日常の生活の上に純客觀の寫生句といふものがあるでせう。そういふ句が、この中にあるか知ら―。

路郎＝幾らでもあるね。

丹路＝つまり人事の句だな

亞鈍＝さう、人事の句や。

（一同雜誌に眼をやる）

路郎＝これはどうだ。

のりのない浴衣で軍需工は呑み　大森風來子

丹路＝そうや、ようけあるぜ。

亞鈍＝風景とか、自然とかに向つてみるのと同じやうに人事を客觀化した、寫生句に作ると、いふことは尠ないのではないかな。

某人＝それが作れたら相當なものだ。

路郎＝それはない事はない故人の五葉や、蔦雄のやうな寫生派の作家には相當あるだらう。

某人＝それだけ徹底した態度を持ち得るだけ、主觀のえらさがあるわけですね。

路郎＝それに、『柳樽』の句には客觀の描詠が多いね。

亞鈍＝萬的の

扇しづかに〳〵支那の唄流る　阿萬　萬的

これなんかどう。

丹路＝これは、先生の言はれた五葉氏なんかの行き方とは違つてますね。

亞鈍＝表現が違ふといふの？

某人＝態度が違ふ。

亞鈍＝ところで、僕なんか五葉といふ人は、恥しながら知らないんだが、態度が違ふと言ふのは……。

某人＝つまりね。此の句には〃しづかに〳〵〃といふ、表はし方が焦點になつてゐて作家もそこを句にしやうとしたことが眼につく。ところが五葉氏の行き方といふものは僕も不勉强で、先生の前では餘り大きな口はきけないのだが、ある時の句會吟に

果物屋客を一べん外へ出し

下五は、ひよつとしたら間違つてるかも知れないが、斯ういふ句でした。當時萬座の人を唸らせたといふことを聽いてゐるんですが、この句には萬的君の〃しづかに〳〵〃と言つた、讀者に氣分を强ひるといふ態度が全然見當らない。作者といふものが、顏を潛めて仕舞つた句だ、と思ふね。

亞鈍＝それから、宵明君の句で、

代書屋の暇を印肉ねり直し　月原　宵明

など、豆秋さんの

書線の下で水晶の印を刻り

などの句と似通つてゐるが純客觀の寫生句と言へるか知らん。共に佳い句だと思ふね。

路郎＝寫生句の客觀描寫だな。

丹路＝〃扇しづかに〳〵〃は、客觀句でも、寫生句でも無いでせう。

亞鈍＝無いかも知れん。

路郎＝〃しづかに〳〵〃はたしかに作者が首を出してゐるね。少くとも文樂の人形に黑衣が付纏うてゐるほどに首を出してゐる。

五葉君の〃果物屋〃の句のやうに純客觀句ではない。

亞鈍＝さりとて、主觀と言ひ切れないところもあるのですがなあ。

某人＝それは、此の句全體が多少曖昧な故ではないか。つまり、はつきりどちらかへ固めてしまふ以前に、句にしてしまつたやうな。讀者側からすると、此の句の鍵は〃しづかに〳〵〃だけしか無いので、其處から入つて行くとすれば、主觀的である可き筈のものが、後のところで、極く平易に主觀的な行き方に移つてしまつた。僕の言ふ曖昧はそれです。

亞鈍＝僕はね。〃しづかに〳〵〃だけの、ものでないかと思ふ。これはまあ、言ふ迄もなしに〃しづかに〳〵〃は扇にかゝつてゐるし〃支那の唄流る〃にもかゝつてゐる。いま、某人が曖昧と言つたね、これを僕が考へ直して見るのに、凡そ客觀の寫生句といふものは、風景にしろ人事にしろ、あちらに有るものを眼で見たまゝの描寫だね。

ところが此の句は、眼に見へる場面も有つたかも知れぬ併し、それを其儘うちに持つて來て、うちらで言つた場合、時に心の中で言つたから主觀の句のやうにも思へるが併し、その主觀の中にも客觀的なものが、無いとは言へないとすれば、この句は主觀の中の客觀。言はゞ、眼に見へてゐたものを一應自分の氣分にのせて、スラツと出したとこじやないのかなあ。

路郎＝〃しづかに〳〵〃が扇にかゝつて居り、〃支那の唄流る〃にもかゝつてゐると亞鈍君の說であるが、〃しづかに〳〵〃は扇にかゝつてゐる。〃扇しづかに〳〵〃であつて、〃支那の唄流る〃には

かゝつてゐない。

亞鈍＝であるなら言ひ換へたいですが。〃しづかに〳〵〃が、扇にかゝつて居つて、〃支那の唄流る〃がかゝつてゐないとすれば、響いてゐると言ひ換へませうか。矢張り〃支那の唄流る〃といふ、何かアンニユイの中に〃扇しづかに〳〵〃が入つてゐると思ふがなあ。

丹路＝それね。文法的に行けば〃しづかに〳〵〃は扇にかゝつてゐるので、場面的に行けば、其の時に流れて來る支那の唄は、靜かなものでなければ句にならない。結局其處に、詮索好きな讀者を迷はしてしまふ引つかゝりがあるのでせう。

亞鈍＝映畫でも見て居たのかな。

路郎＝まあ、この句は今迄の批評で見ても、純粹の寫生でないことがわかる。たゞ客觀描寫の寫生句が、一概にいゝとか、悪いとか言へないこと、寫生句は表現に無理のないこと、小刀細工をしないこと、芝居をしないこと、道具澤山にしないで、第三者の頭に頗る自然に流れ込んで來て共鳴させることが、純寫生乃ち客觀描寫の味であらう。たゞ漫然と寫生句について喋べつたので言ひ足りない點が多いが、今日はこれ位にして置こう。

（凡生筆記）

川柳塔

=路郎選=

廢品の車日向の方へ曳き　大阪　高橋かほる

出征を祝ひ風呂敷忘れて來

歌舞伎座の〝滝の白糸〟見物

白糸へふいに切り戸が開くなり　横濱　福田山雨樓

水藝の着る上下は派出でよし

近衛さんでなくてはならぬ芝居なり

大阪の昔を戀へり夜店の灯

獨ソ聯から最近歸朝の某氏の講演を聞く

日本を齒がゆく思ひ歸朝する　兵庫縣　奥村丹路

生きる道にしても男をまた變へる

草むらに圍まれ我が家秋はやし

近眼の度を女房とくらべあひ

憂鬱な日を橋上に馬倒れ

空閑地どころか庭に秋なすび

めくらさんの裾にいさゝか草の露

お嬢さんと言爭つて女中去に

其の後は師匠と暮して居るそうな　張家口　岩崎柳路

頬杖のどうかと思ふ愚問が出

請賣りで人を笑わす老練さ

ぎんぎんぎらぎら日の渦が雜草に一ばい　芦屋　寺井銳々

齒科の椅子向ひのビルの戸樋が見え

圓轉滑脫君の意見はどつちだね　ハワイ　高澤一浪

日本から來る舊友は閣下なり

明快な答阿呆の阿呆面

下積の俺にもすがるのが一人

多寡知れた遊びと苦勞人の父

澄んだ眼が中途退學せよと言ふ

時の人中途退學にて光り

あの話博士夫人も人間じや

立志傳闇で儲けたとはかゝず

御待ちしてゐますとあれど農繁期

眉や爪唯光陰が憎くらしい

なぜ母と呼ばぬか腹を痛めた子

アパートにもう人形でない娘

かぞしかと思へば生きてゐた眞晝　大阪　戸田孤篷

和寇史を波がきかしてくれました

人生謳歌彈氣で三十五

乳母車菜の買出しに役に立ち　兵庫縣　戸倉普天

鬚があり白髪もあつて車掌なり

隣り組とう〳〵芝生と畑にする

パラソルで茄子もぎに來る休閑地

ホノルル　前山北海

夏期のキャナリー稼ぎ（キャナリーは鑵詰製造工場の略稱）

子等稼ぐ食卓となり皿の數
胸算にキヤナリー稼ぐ子等の金
知事に聞く記者の一人はアロハシヤツ

日支資産凍結令雜觀

凍結令布哇の土となる覺悟
最終の主婦の友だと届けられ
ラジオのみ日本からの片便り

大阪府高石町　米本貴志子

盂母訓ちと家倉が邪魔になり
英靈はいつちやさしい子であつた

小畑氏愚談を讀んで

意氣込んで馳けてる足をさらはれる

兵庫縣　水谷鮎美

電話することが好きなり養子也
讀み耽り人の哀れを知る夜ぞ
船世帶夫婦は首を出しただけ
成あがり者肩のあたりがさびしいね

亡父釋晃信士七回忌（二句）

古型の時計に父を想ふ朝
子澤山など靈魂の滅ぶ可き

大阪　大坂形水

歸還して元に變らずヘイ〳〵と
出張も一寸佛印までとなりまつせ
肥擔ぐ腰の力がある日本

戰地の兄と弟へ（二句）

氏神へ詣らぬ日なく母達者
自愛せよ捧げまつりし身命ぞ

市場所見

檢量に奥さんトマト出し澁り
一列は去く風呂敷の重く見え

大阪　橋本綠雨

腦病院見晴しのよいとこに建ち
沖釣は嘘で魚を買漁り

安土城趾

夏草の茂る中から瓦が出
竹獨樂は大人が鳴らすやうに出來

★

平凡に見える屑屋のあの儲け
いろは順工學博士をビリにする
六圓の宿へ電燈暗すぎる

大阪　篠山篝彦

川柳忌

選者みな柳祖に見ゆる心地して

路郎師柳話

床の間の軸が話をするがやう

下關　國弘半休

怒りを制すると下駄の緒プツツリ
駄法螺吹く按摩世相を見くびつて
農繁期嫁兄弟を呼びかへし

大阪　道廣世紀彦

仙人掌の意思の強さに教へられ
自信・自惚雲の峰にも似て淋し
どう見ても地球近頃圓くなし

姫路　岩崎水虹

後任は飲ませ上手に聞き上手

兵庫縣　西川青美

玄關で鼻緒が切れた大年増

適齢期支那饅頭とテキが好き

山口縣小郡町 岩崎勇記

尾を振れど節米なれば仕方なし

孤獨とはこんな心か一つ星

物よりも女中は矢張り金がすき

西宮 阿萬萬的

潮風まともに歸省した娘が立つてゐた

海を見る女は髪をかき上げて

七輪がみんな出てゐる舟の朝

大の字に寢そべる舟が搖れてゐる

海

奈良を訪ねて

虫よなけ〳〵月はあんなにまんまるい

大阪 谷川綠風

行水を僕で打ちきる雷がなり

夏痩せか三尺帶が長がすぎる

アルバムの父と母とは仲がよし

伊丹 酒井美知夫

氷配達氷の上に汗が落ち

長女出産

女の子名前の用意して居らず

マア素的などと子供のませてくる

金持のなやみお米がまゝならず

もう時間ですけどと三等局笑ひ

皿破つた音を女房は床できゝ

シヤボテンに花を咲かせて遊んで居

病床

家計簿も病めば淋しいものとなり

尼崎 飯尾寄與史

軍需景氣女工パーマかけただけ

頂上淺間神社奥宮にて

頂上に神在します氣の强さ

頂上で大阪辯をしたしまれ

大阪 小川恒明

よし〳〵と子につれられた夜店の灯

晝休あの娘この娘が窓の下

京都 野口柳太

秋茄子一つ殘つて休閑地

さすがに下駄を揃へて上る借電話

大阪 浪花玲之介

容れられぬ意見ポプラの高さ見る

長良川鵜飼

鵜にしても世は儘ならぬものと知り

未生流女に女磨かせる

大阪 津路紅多呂

爪を切るポーズを女知つてゐる

須崎驛より汽車に乘車高知へ向ふ

一列勵行捕手の樣に驛を卷き

德島縣穴吹町 姫田夕鐘

鄉愁をそゝるが如く誘蛾燈

釣瓶から田舍としての水の味

時局講話强氣に出たり弱氣に出たり

たゝき斬つた話軍人なればこそ

大阪 市場沒食子

常會の歸りと知つたソーダ水

增員許可今度は人がないなやみ

お好み燒へ看護婦同志誘ひ合ひ

運が悪い〳〵と心までねぢけ

恥しいサラリー子供も叱られず

辨當を喰ふ大臣は撮される
奉天はブールでこげた子が戻り

奉天 吉田水車

戰闘帽赤い夕陽の中に立ち
留守宅を聞けば長男次女三女
先生に出す軍事便ひまが要り
露人三人背のびしてゐる
明日は征く俺には寒い風よ吹け

ハイラル 宮岡白峰

親しき友のひとりを喪ふ

友の死にぬれた七草揃ふ路
防空のまさしく秋のいろは濃き

松本 石曾根民郎

大阪 正本水客

達者なうちは母の手紙を氣にかけず
コーヒーをおごりあひする勤めの身

大杉谷を探る（二句）

一段二段三段あとは瀬となり淵となり
遠き山嶺よりむらがり落ちる水は白

豊中 黒川紫香

耳掻きでほりほり探偵本を讀み
女教師と生徒草花下げてくる
朝顔を賞めてる人の兒がちぎり

大阪 丸尾潮花

戰へる國に生れて二十一
終ひ馬車麓の霧に濡れて來る
坐つては居られぬ妻へ子が生れ

神戸 岡田某人

ひとの金ながら紙幣よむ目がけはし
しやらしやらと錢よむ音も秋の中

海老の赤もがいて死んだとは見えず
秋の雲よをとこが一人無爲でゐる
秋草を繪とも眺めて無事に飽く
腹立てぬ日々を佗しいとも思ひ
戸を閉めるやうに話を斷はられ

尼崎 酒井斗風

爪を噛む男へ猫は近よらず
雜草の花のごときよ女工さん
城下街のかげなくナツパ服あふれ
辭退する瞳がなんとなく淋しすぎ

大阪 北川春巢

救護班ひまをこぼして茶を貰ひ
長尻の人とは知らぬ初對面
純綿を案山子に着せるのが惜しく
すき燒の野菜のかさも子澤山
休閑地うちの大根芽を出さず
子を抱いてハンドバツクを手放さず
鼻くそを女指輪の手でいぢり

大阪 尾崎方正

病院ぢやないかルテ製作所だ
十年の自信が出來た顏が寄り

大阪 押谷たけを

宣傳は勝つてゐるのに遷都說
型通り診てお醫者樣手を洗ひ
放尿も自己防衛と云ふ蛙

下關 櫻川不水

夏雲へ馬吊り揚げし輸送船
食へば足る大豆、高粱、粟の飯

滿洲 中原銃人

夏痩せにかゝはりもなく糸瓜伸ぶ
佛壇屋その日を待つてゐる構へ
辯解が内規といふに觸れてゐる
高射砲事あれかしの構へなり
廻覽板いとしい人の手へ渡し
許されぬ仲を許すも時局なる
秋風に乘れば哀れなハーモニカ

廣島 濱田久米雄
大阪 菊澤小松園

ハツハツハツお金の仲仕だなと思ひ
代議士の存在むしろ哀れなり
親類も息子の主張容れさせず
戰病死悲しき便り聽くものぞ
獅子身中の虫とはこれか三味の音
ちじれ毛も虛榮もヒスも母親譲り
蠅の眼に額の廣い男なり
大阪辯世の下積に甘んじる
死なば秋、きき(聞き)よう、かるかや、女郎花

大阪 魚住滿潮
大阪 中内翠芳

故障車へ女車掌だけ坐り
もがくだけもがけどうせは一人旅

蔣介石へ送る
下關 多田市多樓

職變へて雲の流れに似た心
腹立てた其の日バケツへ蹴躓き
やかましい女房でそれが取得なり
貰一になりたい様な月が出た
番臺に旅館の下駄を數へられ
仕舞風呂全く戀のない形

徳島縣日和佐町 濱田賢次

強そうに蟹の不幸なふところ手
どつちもがゆずつて女嫁きおくれ
豐年へかゞしの使命かるからず
いさかひも思ひ出となる西東
下駄つつかけて裏街の戀路かな
事務壓縮結局向きを變へただけ
物干へ今朝の着替が九分乾き
是非生きてもらふと子等の顏が寄り
昆虫採集又も逃がしたハイヒール
もう秋だとんぼが俺の手にとまり
信心々々塗下駄が禿げてゐる
留守番の手に雜巾は汚ながり
科學する心で時計壞したり

吳 森宗男
廣島 大森風來子
岡山 逸見灯竿
大阪 夷一笑

稅金を納め素うどん食べて來る
夕燒へ蜻蛉を一ツ見失ひ
朝顏もすんで如露にも用はなし
疑心暗鬼ABCD手をつなぎ
情緒など捨てゝ娼婦のワンピース

大津 鈴木石鹿
今治 月原宵明

曉童君へ

國境を睨んで土へ寢る仕度
一匹の蚤モーニング如何にせん
極道の骨に泌みたる墓參なり
虫が啼く和尚定石竝べてゐる
名月へ西瓜畑は生きてゐる
こほろぎの位置を病人知つてゐる

川柳 世界史

（Ⅷ）

戸田孤蓬

（八）佛教興隆史

釋迦

ウバニシヤツトが出來て吠陀の解釋が普及する頃バラモンの勢力に拮抗する等は思ひもよらぬこと。窒息さゝれそうになつてゐた士民奴三族の中からシツタハルダが産れて天上天下唯我獨尊と喝破する。赤ん坊にしては人間離れしすぎたこの誕生の傳說は俺は一生かかつて正しい物の見方を教へてやるぞ、赤ん坊だと寢ころがつてゐて横なりにしか物が見えないじやないかと。偉大なる釋尊の傳記の劈頭を飾るにふさはしい伏線である。

ゴーダマの眼に強い鳥弱い蟲

人生は樂華で解決しなかつた

聖選み提婆それから恨み出し

はしたない寢像の中でするわかれ

アジヤンダの壁畫に釋迦も嬰女も居り

釋尊は緣ある衆生から證し

又新手舍利弗（シヤリツホツ）メモを取つておく

阿育王

口から耳への說法だけで釋迦自ら書き殘された遺法といつたものは何一つなかつた。入滅の直ぐあとで弟子達の結集即ち大集團が一堂に會して成文の經典を論議しながら練り上げにかゝつてから三百年を經て第三回目の最大の結集が阿育王の意志によつて行はれ印度に於ける佛教黃金時代を現出、周圍の諸民族にまで佛果が及ばうとする。

隣國の僧は譯語を考へる

迦膩色迦王

その後三四世紀を經て佛教の中心は西域にうつる。ギリシヤ文化との接觸も行はれて健駄羅（ガンダラ）式佛像などの遺跡をのこす。

ガンダラ佛ギリシヤの線にはにかめる

白馬寺

南より北にせり上つて來た佛教が支那に傳はつたのは後漢明帝の時代で洛陽郊外に白馬寺の建立となつた。

舍利擡持白馬へみんな手を合せ

（九）羅馬滅亡史

ゴート族

ローマ史を以つて古代の頁を閉じんとする時スカンヂナビヤからウクライナへ又一方ガリヤからブリタニヤへ更にイベリヤからブリタニヤへ更にイベリヤまでゴート族又の名はゲルマン族の大移動がはじまらうとする。シーザーのローマはすでに終り、此のゴート禍を和睦や封建制度の崩芽の樣な國土分割で僅に支へる。ローマ皇帝と云ふい〻星の下に産れながら滿足に盤の上で死ねたは數へる程でアラビアンナイトにでも出て來そうな專制を敢行。

トロフイに大きく鹿を一つ彫り

陽光燦々樹の葉影と子の影と

北斗星ローマの捕虜はくさめする

牛を剖く親ゲルマンに子ゲルマン

酋長の選擧に森は春れ早し

落ち目とも知らず間口をもりつゞけ

專制の果ては童話の王を眞似

コンスタンチヌス帝

植民地壓迫が勢ひキリスト教徒をコロセウムの眞中に追ひ込んだりした時代のあとをうけてこれは亦身も心もイエスに獻げた御人、然し博愛主義が本來のローマの政策と矛盾してローマ滅亡の一因を作る。佛教禍が大化の改新の原因となつた事を思はせる。

謀略と知らずに聞けば有難し

のき貸した筈のイエスに敗けそうな

新都建設せめてナザレのみえるとこ

ユスチニアヌス帝

代が代れば舞臺が變りキリスト眞つ平でシーザーを夢み大ローマの夢を憧れ、卒に伍してゴール征伐の第一線に立つてあつたらの生命を失ふ。

祝ひ酒坊主の骸も數へさせ

俺につゞけローマの果ては海の果て

武玉川四編研究（二三）

梅本塵山
森東魚
姪子省二

（554）

すへても飯の遠い大佛

省二＝大佛の大と供物の小との比較。「飯」と卒直に言つたもよろしからう。据ゑても口までは遠い。

東魚＝前解の如く「据ゑて」であらう。大佛のお口は數丈高い處にある。「遠い」は矢張り距離で、奈良の大佛の膳は四疊半敷の大きさだと聞いた。

塵山＝此の「遠い」は外に適切の文字があらう。

（555）

目に呪を持しふりそて

省二＝目は口以上に役立つ。電撃的呪だ。振袖女の眼には迷ふ。

東魚＝艶な趣。呪とは一寸面白い云ひ方。

塵山＝恐しい呪で男をも殺す。

（556）

春風の斷て行んうめのはな

東魚＝いよ〳〵風も春だと云はんばかりに、梅の花の香を漂はして風がふく。

塵山＝「斷て」は「ことわつて」と訓む歟。

省二＝さよう。梅は冬と春のもの前者に早梅寒梅等あり。（八朝梅は秋だ）。春に入つて梅吹くも、本當に春風が吹き出す頃は謝す。

（557）

鳥くろし橋に羽折の山かつら

東魚＝「山かつら」はしののめの意で、鳥くろしは朝烏であらう。橋の夜明けの寒い心持ち——朝歸りの趣と思ふが、さて橋が何處であらうか。

塵山＝大分道具が混雜した句であるが、橋は何處でも可からう。

省二＝少し判然とせぬふしがある。

（558）

上戸を分に思ふ雪ふり

省二＝酒呑みには口實がいる。雪降りこそ上戸にとつては機會だ『雪見とは下戸の宗旨にない圖なり』。

東魚＝上戸なりやこそ、此の雪を樂しめる、と云ふ心持ちが「分に思ふ」であらう。

塵山＝前解の如くであると、「上戸を」の「を」の字が疑問になる。

（559）

一日ハ薄着てくらすゑひす講

省二＝商家にては年二回の夷講を催したが、後には十月が主となり、席上の品物や着てる羽織などを脱いで、大ゲサな取引の眞似事をして娯しみ呑み且つ食ふ。『夷講上戸も下戸も勤け得ず』で、此の歡樂に對し招かれるもの、招く者、薄着で立振舞ふ。

東魚＝せわしく且樂しい氣分で立振ふから、「薄着でくらす」が大にきく。

塵山＝江戸の商家の夷講は、十月廿日に行つたもので、寒氣の加はる時分であるが、立働きのために薄着になると云ふのであらう。

（560）

山歸來譽る都の水に飽

東魚＝「譽る都の水に飽」とつゞくのであらう。山歸來は故山に歸ると云ふ意を句はして、味な病氣になつた男を詠んだのかと思ふ。

塵山＝實は都の女に飽き、又煎藥の香にも飽きたのである。

省二＝山歸來をのむ身柄となつたので、聊か都にも飽きがきた。

（561）

ゟも眉毛も長い神主

東魚＝神主は丸顏より面長な方が何となく適はしく思はれる。眉毛も長いで長命な神主が想はれる。

塵山＝坊主も同樣であらう。

省二＝丸顏よりは落ちつきがみえる。この神主、勿論相應な年配だ。

（562）

現當二世も口に出次第

省二＝現當二世とは現在と未來の事。現當二世の次ぎに何にか言葉があると句意が明瞭なのだ。安樂とか契とか。現當二世安樂の願望など口に出次第といふのか、夫婦は二世といふが、ある種の男女關係に於て、現當二世などいふ言葉は口に出次第といふのか。

東魚＝戀愛遊戲の場合らしく思はれるが、前句の模樣で自ら解も變らう。

塵山＝佛祕の談義で、戀愛遊戲ではなからうと、私は思ふ。

（563）

佛のゟハの光る十月

省二＝『庵の佛の光る十月』（武16）。神無月で神々は大社に集り玉ふが、佛樣の方は各宗この月には色々な行事が營まれるから、莊嚴に飾り立てられて、佛の顏も庵も光る事である。

東魚＝神の留守故に、佛が獨り巾を利かす心持ちが、ほの見えると思ふ。

塵山＝錦襴の法衣も俱に光る。

（564）

かゆひ時耳かきよりも鹿の聲

省二＝耳の中が、かゆいのは氣になるから耳掻きを用ふるが、そんな事より、鹿の聲を聞くならば、全身の神經は聞き耳をたて、かゆさなど忘れてしまふ。鹿聞禮讃句。

東魚＝鹿聞きは風流な事として、珍重されてゐた時代である。

塵山＝杜鵑にも共通される句である。

省二＝『卯の花が咲いたぞ耳の穴をほれ』は時鳥の方だ。

(565) **日廻りの前へ廻れハ膳が出ル**

東魚＝夕方日の落つる方へ向日葵が向いた氣がされる。

塵山＝向日葵の前へ廻るのであるから、晝食の膳であつて、夕飯ではないと想ふ。

省二＝向日葵は太陽につれ、廻るものではないのであるが、昔から歌や句には廻るものとして其名が起つたのである。此句は日廻りが前に廻つてきた、坐敷の方へ向ひた頃、食事時となるのではないか。

(566) **空若く柳の奥の針仕事**

東魚＝門に柳のある奥まつた住ひに、女世帶の針仕事をして暮してゐる。まだ若いのにと心をひかれるのであらう。「空若く」は「あだ若く」であらうか。「そら若く」であらうか。意は「あたら若さを無駄に」との心持であらうと思ふ。

塵山＝此の「空」は天空の意ではなく、「うら若く」と云ふ意である。

省二＝アダと讀むならむ。

(567) **形見とて貰た文に火かもへる**

東魚＝今は亡き人に昔送つた文殻を、形見だと返されてみれば、又昔の情熱が燃える事である、とでもあらうか。

塵山＝昔、大いに流行した、「傾城淺間嶽」の淨瑠璃や演劇に、屢々使はれた圖である。

省二＝着物なども貰らつた事ではあらうが、形見の一つとして手紙もあつたのではなからうか。私は前に差出した文殻と迄は解さなかつたのであつた。

(568) **酒の肴に鼻をつまゝれ**

省二＝酒呑は話相手が欲しい。そして、酒機嫌で一寸したいたづらもする。酒の肴、即ち酒興に鼻をつまんだりする。——『戸障子を酒の肴におつばづし』。これは雪見のためだ。

東魚＝酒興のくせも色々あるものだ。私は醉ふと女共の顏を、逆撫でする癖があつた。今は決してそんな事はない。

塵山＝前の辯疏は、東魚君老いたり矣歟。

(569) **世を捨た人も辷れハ恥かしく**

省二＝辷べるといふ事は注意が十分でなかつたからではある。あとでお可笑しくもあり、又、恥かしい思ひもする。世を捨てた程の人でさへも。——世捨人だから辷べる位、氣にとめる事ではないかもしれぬが、餘り體裁のよい事でもないから、一寸氣恥しく感ずる。

東魚＝世を捨てた者は、世間の手前も何も考へない筈だのに、流石不意に辷つた途端に、ハツと恥かしい氣がする處、未だ本當に捨て切れぬ世だ。

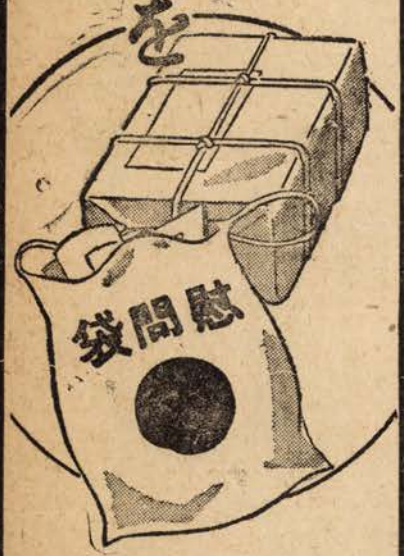
塵山＝大悟徹底せぬ腥坊主である。

省二＝洋行戻の話に、外國の映畫館で、辷り轉ぶところが映ると、日本人は大に笑ふが、外國人は餘り笑はぬと。こんな點にも彼我の性情の相異がある。

武玉川四編研究正誤表（二一二號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
四	五	六	不勝手	お勝手
五	二	二四	天道へ丸	天道丸へ

戰線の將士へ
白衣の勇士へ
慰問品を



慰問品賣場　一階

實用向百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

吟行地調べ 奈良篇 (八)

麻生路郎

(37) 元興寺

★元興寺は猿澤池から南へ五町餘の元興寺町にある。

★寺の起源は聖德太子が蘇我馬子と協力して飛鳥の京に建立し給うたものであるが、平城京に遷都後は左京四條・五條に跨る七坊に四町四方の地域を占め、長く興福寺と對峙してゐたが、興福寺は藤原氏庇護の下に隆昌を極めたのに反し、元興寺は世を經るに從つて寺運が傾き、遂に安政六年には五層塔婆も燒失し、周圍石壁を繞らした土壇に十七個の礎石を殘し方三十二の塔婆の址であることを僅に知ることが出來るだけに荒廢した。

★そして舊十一面堂と推測し得れらる位置の假堂に十一面觀世音菩薩と藥師如來との國寶二體を擁するに過ぎなくなつてゐる。

★昭和二年九月以降に、心礎の周圍地下一尺二・三寸の深さから勾玉瑠璃玉捻玉等の玉類や和銅開珎・萬年通寶・神功開寶等奈良時代の遺物が發見されたのに見てもこの寺の往時が想像されやう。

町の名に殘る末世の元興寺　路郎

元興寺まだまだ殘が出そうなり　同

元興寺礎石數へて引きかへし　同

(38) 極樂院

★元興寺の子院であつた極樂院は市役所の南西二町餘、中院町にある。今は西大寺末となつてゐるが院内は荒れるにまかせてある。

★創建は天平の昔に遡り、鎌倉初期に歌聖西行法師が再建に盡力したとも傳へられてゐるが現存の建物は鎌倉中期を上下するものらしい。

虫すだくままに極樂院は荒れ　路郎

極樂院一夜をあかすほどに荒れ　葭乃

極樂院おうと答へる聲もなし　同

(39) 十輪院

★十輪院は元興寺から東へ二町餘の十輪院町にある。靈龜元年、元正天皇の御舊殿を拜領し吉備大臣公嫡子朝野魚養師の開基した古刹である。

★元は元興寺の別院で南光院と稱し、聖武天皇の勅願所であつたが弘仁年中、弘法大師が留錫して現在の石龍を造立し、本尊地藏大士釋迦彌勒、十三、四天王毘多の諸曜星等を彫刻安置することとなつて十輪院と改稱されたのであるが、今は眞言宗に改屬して醍醐寺末となつてゐる。

★寺傳によると養老年間に宮居を施入して梵刹とされたと云ふことであるが、今の建物は鎌倉中期の建築物（國寶）で住宅風を採り入れた點が特異とされてゐる。

★護摩堂にある本尊は弘法大師の作と稱する石彫の地藏菩薩で、石窟の中に安置し、石の扉には牛肉や筋彫の佛像が多數刻んである。

★その昔弘法大師が此の寺に留錫して寺僧朝野魚養について書を學んだといふ傳說がある。魚養の古墳は寺の東側にあるが特に注意しないと見落す程度に荒廢してゐる。

十輪院廊下へちよつと腰をかけ　葭乃

十輪院魚養の墓探すなり　路郎

行基菩十輪院へ博士が來　同

(40) 頭塔

★頭塔は十輪院から東北約五丁ほど距つた高畑町字頭塔町にある。樫などの古木がこんもりと茂つた小高い丘が聳えてゐる。それが頭塔と呼ばれてゐる丘である。德川期の造立にかかる五輪の塔がたち、一見、方墳のやうな形態をしてゐる。

★頭塔は南面から登り口がつけられてゐるが、史蹟指定地として柵が設けられ一般に公開されてゐない。石佛が見たければ奈良縣廳の許可をうけなければならぬ。

★頭塔は僧玄昉の頭骨を葬つてある所だといふ傳說がある。天平十八年僧玄昉が筑紫の觀音寺に供養の導師となつて行つた時、藤原廣嗣の怨靈に、その頭首を虛空にとらへられた。ところがその翌年、玄昉の髑髏が興福寺の唐院の庭上に落下した。唐院といふのは寺の西大門内の南側、今の新溫泉紅葉館の地である。僧徒等は骨を三方に分けて葬つたがこゝには墓を築いて頭を埋めた。それで頭塔の名が

あるのだと云はれてゐる。

★市の南端の肘塚町はカヒナを埋めたとこで、近年までは肘塚といふのがあつたそうだ。市の中部にある大豆山町は眉と月を埋めたとこだとも傳へられてゐる。

★當時の新智識を代表した僧玄昉の死が、何か非常の死を遂げたらしいので、こんな傳說が生れたものであらう。

★澤山な石佛が方形の堆土の周圍に配置されてゐるが、石彫の技法や瓦の模樣などが天平時代のもので藝術上重要な資料とされてゐる。

一ト巡りすると頭塔は閉める音　路郎

(41) 新藥師寺

★新藥師寺は頭塔の森から六七丁東にある。天平年中、聖武天皇の御眼病平癒祈願のため、光明皇后が創立されたのであると傳へられてゐる。南門と內らの鐘樓とは鎌倉時代の建築であるが本堂は奈良朝時代に創立されたままで七間五面の入母屋造りである。

★本尊藥師坐像や、もと岩淵寺にあつた國寶十二神將の塑像（一體だけ木造）や、香藥師などがあつて名高い。こゝを見るのには特別の許可が要る。

★十二神將は大昔、大洪水で岩淵寺から流れて來たものだと云はれてゐる。岩淵は新藥師から東南十丁ほどへだたつたところで弘法大師の師僧勤操僧都のゐられたところである。

★境內地藏堂の地藏石像は高さ五尺七寸の舟後光型の石に地藏立像を陽刻したもので永正三年二月の刻銘がある。地藏尊の口唇に小さな紙片が貼付けられてゐる。子供のくさの呪ひだそうである。

十二神將寫生の薄謝包むなり　霞乃

十二神將チヨンと木頭ひびきさう　同

頭塔の三尊石佛　編輯氏晉井撮影

こぼれ客新藥師寺を儲けさせ　路郎

十二神將一人は寫生され通し　同

(42) 春日奥山巡り

★奈良古代の建造物に千二百餘年の昔を偲ぶと共に、春日奥山を一週して自然美の幽邃閑寂を滿喫しない限りは眞に奈良公園を觀たとは云へない。

★春日山は原始林として天然記念物の指定をうけてゐる

★一周の行程は約三里、バスによる立派な週遊道路が出來てゐるが、最近は週遊バスが廢されてゐるので徒歩で廻遊すればいゝ。急坂がある譯でなし、女や子供の足でも易々たるものだ。

★奥山巡りで觀るべきものを列擧すると、若草山頂には史蹟鶯塚があり、月日の磐、七本杉、鶯瀧、興福寺の別院歡喜天、原始林、春日山石佛地獄谷石窟佛、寢佛、朝日觀音、夕日觀音、瀧坂妙見、蝙蝠窟などがある。

月日の磐は水谷川の淸流の中にある日月の形を彫つた磐石で、和銅三年氷池を吉城川の上流に設け朝廷が供御の料とせられた時の址だと云ひ傳へられてゐる。水室神社もはじめはここに祀られてあつたと云はれてゐる。附近の洞の紅葉も名所の一つである。

鶯瀧は春日山石切峠附近に源を發してゐて、奇岩絕壁から落下し四丈餘の飛泉となつてゐる。歡喜天の堂宇はすぐその上にある。寢佛は約四尺角ぐらゐの自然石で瀧坂街道の路傍にころがつてゐる。

岩の背面に大日如來を陽刻してある。これはもと左手の山腹にあつたのであるが崩落したのである。大日尊は金剛界の大日尊で智拳印を結んでゐる。多分足利期のものであらう。

朝日觀音と云うのは寢佛から數町東で、溪流をへだてて對岸の斷崖に切りつけられた三體の石佛で、ホントは觀音ではない。中尊は釋迦如來で脇侍は二佛弟子と見るべきだとは西村貞氏の說である。

瀧坂妙見を西に下つて、右の方に溪流に沿うて大きな岩窟がある。これが蝙蝠窟で間口二十餘間奥行五間餘、むかし春日砥を採掘した跡だと云ひ傳へられてゐるが今は蝙蝠の棲家となつてゐるのでこの名がある。尤も今は埋づもれて奥行が五間餘あるとも思へない。

ハイキング蝙蝠窟はもう過ぎた　路郎

奥山は栗ふんで行きふんで行き　同

寢佛を步け步けが通り過ぎ　同

寢佛のこれも一つの生きる道　同

蝙蝠窟姐御が住んでゐさうなり　霞乃

蝙蝠窟へ秋の陽ざしの暮れ易く　同

妙見坂にて

石段の下へ賽錢箱欲しし　同

のろひ釘とどかぬ杉の太さにて　同

小鳥だつたらわたしも來てる奈良の奥　同

採る可からずの札胴亂を提げて讀み　同

奥山で鹿苑知らぬ鹿と逢ひ　同

近作柳樽

路郎選

山陰の旅（三句）

定期券勝手に行けといふ如し　兵庫縣魚崎町　谷口寒草　同
私生活こんな貧しき法學士　同　同
社の不平いよ〳〵つのりビールのむ　同　同
喀血をしたのも今はなつかしき　同　同
無花果が空家の庭で無駄にうれ　同　同
須磨明石明石は馬でまけたとこ　奈良縣王寺町　森田カズヱ　同
温泉の宿で米の話をしてくらし　同　同
公休日姉さん被りよく似合ひ　同　同
公休日壽司巻く事も教へられ　同　同
休閑地隣と同じ種を蒔き　同　同
休閑地實がなり出して行き届き　和歌山　秋月宏方　同
藝妓はんしんみり米のことも云ひ　同　同
名人を長考させた歩一つ　同　同
武運長久百も神様お承知だ　同　同
鍬持てば寫さるゝ程出世して　同　同
氣は若いだがおつさんともう呼ばれ　姫路　小川靜觀堂　同
カルシユームだよと毎日雜魚ばかり　同　同
言ふほどに利きそうもないＡＢＣＤ　同　同

ひき具した子供へ海の時化もよひ　同　同
山陰の旅降つて來ておどろかず　同　同
旅なれや講談倶樂部九月號　同　同
百姓が好きな娘の紺がすり　廣島　大山露斗　同
芋づるのこころで鎌でちよんぎられ　同　同
十九貫ラジオ體操しんどがり　同　同
盲目の母と座れり晝日中　同　同
まづしさのゆかの下なるきりぎりす　同　同
理髪師は自分の顏に見あきてる　愛媛縣大洲町　武田京司　同
公園の猿になかなか子はあかず　同　同
出世して父母の肖像畫も畫かせ　同　同
平和とは弱者の聲に似たひゞき　同　同
電髪は不幸娘のやうに見せ　同　同
庭石を運ぶ荷馬車が三臺も　京城府　季澄峰　同
電話にて今日の暑さを勞はられ　同　同
統制經濟下其の辣腕は止し給へ　同　同
煽風機香水の香はどなた樣　同　同

奇縁同稱記

北京　森東魚

北京に、もう一人東魚が居られたさうだ、どうも不思議な御縁である。御面質の緣に因んでの號であられるとは、岡田東魚氏と同樣である。私だけは緣からではない——蛸からである、「高時を東魚は蛸の見立なり」其他から久良伎翁が命名されたもので、蛸法師の舊號から轉化した譯で、國賊高時に緣のある次第では決してない事は申す迄もない。（何だか無い無い盡しの樣だが——）

最近私は本名の同名異人にぶつかつて苦笑した許りの處である。と云ふのは、北京の民團課金が非常に多額に思はれたので（どうも少しくケチな考へだが）顎に響く問題であるを如何せんなのである——）民團の係へ出頭問合せた處、全く間違ひで〇圓〇錢が本當でしたと云ふ返事、これは有難い（ソレそれが卑しい）と思つて歸つて來ると、忽ち追掛けの電話で、矢張り貴下のは間違つてゐません、間違ひだと思つたのが間違ひで（どうもやゝこしいね）それは交通會社に同名同姓森榮一と云ふ人があつて貴下の方はずつと所得が多いですよ、と嬉しいやうな嬉しくないやうな話になつた事がある。三百落したと云ふ氣持ちがしないでもない——思へば前の上海事變の時最初の名譽の戰死者の中に、水兵さんで同姓同名

冥想の飛んでも無い事丈け浮び　同
嫁に行く辭表は一寸嬌態を見せ　西宮　谷口綠葉
トーストで稽古待つ間の妓が二人　同
代用の商談一應聞いとかれ　同
英靈へ窓からおがんで濟みません　同
用達しは呑むから女房行くと決め　ペオ、ケ　長谷川　岬
箸取れば日本の季節思ひ出し　同
米國
虫のよい制海權を作る地圖　同
二等後家娘の方へ寄りつかず　同
齒科醫みな二階へ客を上らせる　大阪　富岡巨人
ベニヤ板コト〳〵コーヒ店が出來　同
奢侈品の多きに氣付く土用干　同
コーヒと蜜豆まだ夕立がやまぬなり　同
ABCDラインなるやうにしかなりません　岡山　本田ユリヱ
古典ものひもとく落着をとりかへしぬ　同
家庭教師のさつぱりとしたみなり　同
友禪模様めく夾竹桃と古き屋根　同
柄にない物手に入れた質流れ　大阪　有馬千斗
逃腰でABCD騒ぎ立て　同
道へ畫く汽車賞めてやる紙芝居　同
鈴蘭燈そんな時代もあつたのか　同
箒草俺より太い影を持ち　岡山　佐伯鷄城
夜の闇は此處から湧くか深い泥溝　同
汗かいてゐるよな空を赤トンボ　同
噴水は嘆息夜の風にのせ　同
遠足の中に佝僂の兒が目立ち　大阪　桝岡詩朗
生活の半分叩くタイピスト　同
塀の外娘が通る氣配する　同
家計簿へ書けない程の費ひやう　同

友人結婚（二句）

高砂や獨身稅は昨日まで　布施　岩本晴美
產めふやせその實績を待つばかり　同
眼の青さ人形も或る日スパイめき　同
鬼の舌震ひにて
吊橋を渡るに都會人と知れ　松江　本庄快哉
眼帶のまゝで映畫を見るをんな　同
夕燒けへお臍を見せた辻り臺　同
休閑地唐もろこしの垣が出來　大阪　米田春童
貸ボート蠟燭代は別だつせ　同
滿月へ商店法の幕をしめ　同
痩せたい女肥えたい男議論する　愛媛縣角野町　在間小樓
出船の灯夜釣一ぷく吸ひつける　同
無口な人に大きなやつが釣れ　同
夜店の灯十圓札は無事歸り　大阪　松浦帆船
二階借そんなに干すなとも云へず　同
蜻蛉とりまた自轉車につき當り　同
戀文に手紙吳れなとありにけり　同
割引の復券午後は氣兼なり　大阪　富本無煙
狀差に明日は〳〵の筆無精　同
七厘へ裏の師匠は舞扇　同
新婚はとかく親切煩さがり　京都　川島諷云兒
貧に耐ゆ少年の口一文字　同
此の金も妻の豫算の內のもの　同
校長の訓示に笑ふ女學生　大阪　保田呆人
後添が來て絕交の家が出來　同
梅雨つゞき松岡式の句もよめる　同
夏休み姉も手傳ふ子の科學　大阪　中西彌生
ワンピースはつきり見せたうゑ種痘　同
動物園猿に財布の底見られ　同

興亞號飛ぶ

岡山　鈴木九坡

「我等の興亞號」が飛來するといふので、朝から町の人々は大人も子供も、もう聞えて來る筈の爆音を今か〳〵と待つてゐたのである。

この興亞號こそは「屑も溜まれば飛行機戰車」などといふスローガンのもとに、町の人々がの人があつたのを新聞で見てオヤ〳〵と思つた事もあつた。それ以來これが二度目の同性同名問題である。ベストやコレラで死んだり「逮捕さる」なんと云ふので同性同名を新聞に見てもしたらさぞ寢覺めが惡い事だらうと思ふと妙な氣もされる。

くさるまいものか同名ひよんな記事

などとなつては苦笑どころではない。

兎もあれ日本を離れたこの北京と云ふやうな土地で同じ道に遊ぶ同じペンネームの人間が落合ふと云ふのも全く何かの因緣だらう。然し私は古川風竹氏に寄せられたと云ふ增田東魚さんの「事に依れば抗議」を申込まれる筋合ひは斷じてないと思つてゐる。まさか本氣に增田さんも抗議を申込まうと思つて居られもしなからう——ビールの時期だ。德國飯店の冷たいやつでも引つかけて朗らかな對面風景でも實現させるとするかな。

素晴らしい門同名へちつとてれ

樟腦が袴の折目からこぼれ　布施　小谷華素兒
あの頃を思ひ出させた鏡掛け　同
前線を銃後便りでかばひ合ひ　同
姐さんとやらも來ている軍需工　名古屋　松井靜子
嚴然と本日賣切申候　同
とんぼ釣りまことに好きな子なりしが　同
歸農する女給山陰線は雨　京都　小坂ふじ彌
常識の範圍のことでもめてゐる　同
逢ひにゆく帶はきつちりしまるなり　神戸　平川久枝
饒舌な男の下駄がちびてをり　同
趣味が合ひ身分なんかへこだはらず　廣島縣竹原町　杉原愛鳩
配給のマッチだと云ふ使ひやう　同
再婚も好しとは遺書も水臭し　大阪　山本葉光
ヒステリで銃後を護る恐ろしさ　同
一圓の國債を買ふ子の元氣　臺中　高山武士
放浪記讀む娘酒場に擦れている　同
日給を聞かれてビール咽せかへり　大阪　松枝靜波
はき替の無い靴雨の中を行く　同
叱られたとこから子供列になり　島根縣　横川美柳
ひやかされさうに驛から最合傘　同
こんな所で住みたいですな調査員　島根縣橫田町　新出谷一聲
廻覽板も汚れ勝手も覗き馴れ　同
薄情な女黃色い煙草の輪　大阪　木下誠治
釜ケ崎にて
長閑なり乞食の常會　同
尺八は青い額の人だらう　大阪　中野延枝
女一人四疊半さへ廣過ぎる　同
友の言ふ旅館なる程水の音　大阪　吉川琴聲
單線も旅の心を和げる　同

ヘルメツト大い位は我慢して　大阪　松永青雲
夜間診察醫師は支那語の唄稽古　同
出養生體操出來る樣になり　大阪　橋口松嵐
シヤボン玉畫寢の父の上で消え　同
仲好しの同なじハンドバック提げ　岡山　岡眞理子
反撥しあふ氣持がさせる日の無口　同
通勤は寢てゐるやうで乘り越さず　大阪　菅平行
線路まで出て來て蛙引返へし　同
停電へ勿體なくも御燈明　大牟田　上村十四之
これだけが取柄天長節生れ　同
降るらしい雲へ勤勞仕舞ひかけ　松江　恒松叮紅
丸々と育つてゐます妻の筆　同
登記の歸り三味線に軍歌のせ　和歌山　田島破皷
こめかみに我執しつかと根を下し　同
空閑地白魚の指惜しみ無し　東京　山田宙望
かばかりの野望に多い人の數　同
天高し不精髯でも剃りませう　大阪　新谷柳風
原書戀文電氣スタンド淡き色　同
富士登山銀明水にて
富士ホテルライスカレーも出來ます。　尼崎　江口正路
一合目ここも富士かと草をつみ　同
夏休み帶を結んだ先生と　大阪　橋本美奈子
晩酌に修業時代をきかされる　同
母ですといふ自惚が子を叱り　大阪　武部香林坊
ボロを出す肚を定めたり隣組　同
母と娘と二人で植えた谷間の田　山口縣小郡町　鹽谷鯛好坊
雨宿り連れもやつぱりスフらしい　同
增產へ今日も廻るよ製繩機　松山　沖原綠風
恩は恩もうこれ以上負ひ切れず　同

實行してゐる廢品回收運動によつて、獻納されたもので、いはゞ縣民一致の努力の結晶とでも言へるものであり、さればこそ斯くも皆に心待ちに待たれてゐる譯であるが、その日「我等の興亞號」は空から「國債を買ひませう」のビラと、少數の國債引換券をも撒布するであらう、といふ誠に結構な噂が擴がつてゐることを、誰もが知つてゐたのであつた。そしてやがて空の彼方に微かな爆音が聞え始めると、人々はソレと許りに戶外へ飛び出したのであるが、「我等の興亞號」は悠々と頭上を旋回した後、遙か下界で途方もない期待にもしやと胸を躍らせてゐるであらう人々の瞳からおもむろに姿を消して了つたのである。そして問題の引換券は一枚も地上に降つては來なかつたし無論どこかの屋根の端にさへも引つ掛かつてはゐなかつたのである。然し乍ら先刻までは、長い竿へトリモチでもつけて屋根へ上つてゐるかな、などと話し合つてゐた人々も、別に期待を裏切られた不滿の表情もなく、それは至極當然のことの如く、さつさと家の中へ引揚げたのであつた。

矢つ張り空から降つて來た國債ではなア、と誰かゞ呟いたがそれは決して殘惜しみではなくこの銃後にいそしむ愛すべき町の人々は、國債はたとへ一枚でも、それはお互の汗を流した尊い金で買はなければならぬ、といふことを矢張りちやんと知つてゐたのであつた。

蜻蛉とる竿の先から日がしずみ　名古屋　八幡勿來
兄歸還やつぱり癖はそのまんま　同　〃
アルミ貨の音も神様しろしめし　諏訪　牛山臥牛
俺の汗を感じたかと芋を掘り　同　〃

長男死去

穴あいた障子涙がまたあふれ　大阪　上山よしみ
歩け歩けＡＢＣＤ包圍線　同　〃
空閑地結局草が生えるだけ　松江　岡崎祥月
ドレスメーカーます〳〵盛品を活かし　同　〃
かはりつばな第一球を打たれたり　京都　馬場理公
大阪へ通うてゐますブタカバン　同　〃
出勤に間がありバツハ聽いて行く　國館　山木幸一
待合室ビラが替つた時の波　同　〃
人情にまけてゆたかなこゝろに灯　松本　川上遼二
たゞ默し平和産業の職工　同　〃

皇軍南部佛印へ上陸

椰子の葉へ無事上陸の風があり　北支　宇敷桃水
聖戰へ二度のお召しのぼこらしさ　同　〃
戰線も閑な日があり酒保の味　神奈川縣相模原町　尾崎保柳
戰友の屍を越えた日もあつた　同　〃

攝津中山寺に參詣

中山寺ベンチに目立つ中將湯　大阪　佐野牛歩
旅歸へりあゝ我家がよい我家がよい　同　〃

平沼國務大臣狙撃

重臣の勞を謝さずに何事ぞ　大連　中村酉生
島民の踊映畫を思ひ出し　南洋パラオ　鍋島白帆
轉業はあつさりのれんあきらめて　島根縣　石丸順子
あきらめて吳れと遺髪を前に置き　布施　上田翠光
ハイキングいらない地圖も持つて行き　松江　村上四希
大白壁に似ず平凡な人が住み　松江　石原松江子
公園の秋ＷＣに灯が淋し　松江　吉岡遲兒
修養は苦惱の中に見出され　大阪　吉谷壽堂
組長にされてから心臟弱くなり　大阪　麥野土運九
遮斷機が上り遭遇戰開始　發ケ池　三輪丘堇
永住の家は蜘蛛にも見放され　松本　西藤義春
いら〳〵と朝を出るなり使はれに　大阪　丸島利生
隣組議論は抜きで歩み寄り　堺　村上角堂
流行歌支那語を少し入れておき　大阪　後藤和坊
發車する窓へ振る手の短かすぎ　大阪　浪花駒志希
叔母さんの心が車窓について來る　大阪　南要兒
歩くこと健康法にして九月　島根縣　田中弘樓

和歌山に遊ぶ

連れだつて橋もわたりぬ新和歌の　神戸　渡邊能美

和歌山にて

忘れもの記念においたやうにいひ　神戸　新聞透木
草刈の奉仕にうれし露と汗　伊丹　岩井泉
拜みますなど〵銚子の追加なり　大阪　宮田不二
病院の匂ひ冷き控室　大阪　藤森小雅子

義妹結婚

彌榮の國を固めるい〵契り　岐阜　藤井紫朗
タイピストぼんやり見てる窓の雨　京都　奥田杜的

從姉の產月近し

男がい〵女がい〵と家庭圓滿　廣島　福原里九
御妊娠ですと言はれて落付けず　大阪　朝田章
風の跡蜘蛛の巢のみは依然たり　堺　居谷一柳

八月十六日富士登山頂上

頂上でその大聲もさびしまれ　尼崎　安澤加久榮

健全漫畫雜誌
月刊
大阪パック
價　二〇錢
送　一錢
全國ノ書店賣店ニアリ
發行所
輝文館
大阪市東區橫堀二
振替大阪二六四番

お隣組のための脚本

劇柳川 みやうが宿（一場）

小畑自有浪

時は昔、處は或る宿場の町はづれ、人物は、亭主、女房、甥、客他に、聲だけの人二三人。何分時代物なので鬘が要りますが、これは、白い布か紙で頭巾を作つて、其れに墨ででも畫いて被つて下さい。舞臺は、毛布でも敷いた部分が座敷の心で、下手程よき所に、抱きみようがの紋を入れ、みやうが宿と書いた紙ののれんを吊つて下さい。こののれんに、會の告示事項等も書き現すのも一つの方法かとも思ひます。はいツ、ちよん〳〵〳〵とかまぼこ板の拍子木で幕の代りに襖が開きました。

亭主が、座敷で煙草を喫ひながら、門口で、客引のために頑張つて居る女房へ呼びかけます。扨此の亭主の紛裝なのですが、何分漫劇風なお笑ひ物ですから、何んだつたら、もんぺいでもはいて、例のアーノネエのおつさんを眞似て見たら面白かろうと思ひますので臺詞もかりに彼氏の調子を拜借して書いておきます、而し、お上の方から「わしやアかなわんよ」の臺詞は發禁？　とか聞き及んで居りますから、どうぞそのおつもりで。

亭主　おい〳〵かあさんや、まだ客らしき者の姿は現れよらんかね。

女房　へえ、現れよることは現れよりまんねやけんど。

亭主　どうしたというのかね

女房　やつぱり今夜も向うの辻を右やら左へみんな曲つてしまひよりまして。

亭主　はあてね。

女房　こら、今夜もやつぱり不漁らしうをまつさ。

亭主　困るよ、そりやア困るよお前、開業以來此處に半歳、まだ十人の客もないんぢやからね。（と此時、下手で「毎度有難度うさまで、お二人さんお泊りーい」と景氣のよい聲がする）ありや〳〵。

女房　あゝしもうた。

亭主　どこえやられたかね。

女房　又近江屋だつさ。

亭主　ちくしよう。（と吸殻をはたく、と此時又上手で「毎度おありがとうさまで、五人さんお泊りーい」と聲がする）あれツ。

女房　又やられた。こんどは若狹屋だつさ。

亭主　野郎ツ。

女房　（下手を見て）あ、お父ツつあん。

亭主　又やられたかね。

女房　來よりましたがな〳〵十人あまりの大口が來よりましたがな。

亭主　えゝツ、そ、それは大變だ。開業以來が一つぺんに來よつたんぢやないか。

女房　どないしまひよ。

亭主　やるんぢやね、しつかりとやるんぢやね。

女房　（大聲で）毎度有難たうござゐますこちらは名題のみやうが屋でござゐます

亭主　其調子〳〵。

女房　お風呂もぢやん〳〵と沸いて居ります。

亭主　よろしい。

女房　それからア晝、なんだしたいな。

亭主　おい〳〵、そんなお前肝腎要のところで拍子を抜いてしまつちやア困るぢやないか、（とあわてゝとび出して）あのね、わしが今からやつて見るからね、よおツくおぼえておいてもらわんと困るよ、あーのねお客さん、わしとこはね、自慢ぢやないがね、障子も去年張替へて、いや、昨日眞つさらに張り替へてね、疊の表替は勿論、蒲團はどんすでね、寢卷がこれ又羽二重ぢやがね。

女房　まあ、お父ツつあん、そんなでたらめなことを。

亭主　なアに、此の非常時に氣の弱いことを云つてちアいかんよ、萬事は心臟だよあのねエそれからねお客さん、裏に離れ座敷も新築、いや、實は建て様と思つとるんぢやがねエ、何分釘が無いのでね。

女房　お父ツつあん。

亭主　まあ〳〵かあさん、あんたはだまつて居なさい。

女房　あゝツ、あつちい曲りかけましたがな。

亭主　あゝツ、おい〳〵お客さん、そちらへ曲つちまつてはこちらが困るよ、おいツ、聞こえんのかね。

女房　あゝとう〳〵曲つてしまひましたがな。

亭主　わしやつんぼにはかなわんよ。（と下手で「十三人さんお泊りーい」と聲がする）

女房　あのね、おぼえとれよ。（と此時又、上手で「三十人さんお泊りーい」の聲がする）やられたツ。

女房　お父ツつあん。（と泣聲を出す）

亭主　泣くんぢやない〳〵よ（と此時下手で「五十人さんお泊りーい」）ひえツ、（と思はず引ツくり返へろうとする）

女房　お父ツつあん、しつかりしておくんなはれ。（と抱きかゝへる）

亭主　こ、これがお前、しつかりして居られるかね、五十人さんと云へば、わしとこの何年分の客になるかね無茶苦茶にも程があるよ。（と此時上手から、甥が、野良歸りの風體にて、鍬を擔ぎ、片手に茶瓶を持つて來る）

甥　おつさん。

亭主　おや、お前は甥の杢兵衛ではないか。

甥　景氣はどうだす。

亭主　そ、それをお前が聞いて何に成るのかね。

甥　なあおつさん。

亭主　うるさいね。

甥　いツつも〳〵同ンなじ様

なことばつかし云うて、うるさうおまつしやろけど。

女房 わかつた〳〵、宿屋の夕間暮いうたら、一番肝腎な時やさかいに。

甥 へい、歸ります。歸りますけんどなアおつさん、先祖傳來の田地田畑にペンペン草を生やしておいて、今更こんな、思出した様に宿屋やなんか始めなはつたところうで、さうたやすうお客さんが來てくれるもんやおまへん。

亭主 又お前なにかね、叔父上のわしに意見をするのかね。

甥 いえ、意見やおまへんねやけんど。

亭主 うるさいよお前、わしの田地田畑にペン〳〵草が生えるのが、勿體なければお前が作ればよいぢやないか、それにお前手不足ぢやのなんのかんのといつて、他の奴等もみんな作ろうとしないのぢやないか、勿論少々小作料が高い嫌ひがあるかも知れんが、わしやさう安うでは貸さんよ。

甥 いえ、小作料の安い高いにかゝはらず、村の人達もみんな手一杯の田畑を耕しとりますもんやさかいに。

亭主 それ程手一杯の百姓を明けても暮れても汗水たらしてやつとつて何かねお前多勢の百姓の中から一人でも百萬長者が現れたかね。

甥 そ、そんな無茶なことを

女房 無茶やあらへん、まあやう考へて見なはれ。

亭主 さうぢやよ、如何に百姓は百萬長者にも千萬長者にも成り難いということは

女房 わたえらが、此處五十年。

亭主 身を挺して經驗して來た尊い體驗談ぢやからね。

甥 然し、人間にはそれ相應持つて生れた役目というものがおます。わし等が如何にあがいたかて將軍様に成れるもんやおまへん。

亭主 そ、此奴、社會主義者かね。

甥 又、將軍様が、如何におあがきなされても、わし等の様に、氣樂な百姓に成られるもんやおまへん。

亭主 阿呆につける藥はないものかね。

女房 やいとがおますけんどな。

甥 さうだつさかいに、將軍様は將軍様の御仕事に、わし等はわし等で百姓の仕事に、一生懸命に働いたらよろしおまんねや。それに自分も、持つて生れた役柄も忘れて、わしが將軍様に成り、將軍様がわしの代りに百姓をおやりなすつても。

亭主 おいかあさんや、お前

甥 それに今更、あんた等が。

亭主 うるさいよお前、同じ一生なら樂をして暮さにや損だといふ、こんな明白な事實がわからん様なお前に、何を云つても無駄だよ。

女房 なあ今に見とりなはれ此の宿場一番の旅籠に仕上げて見せまつさかいに。

亭主 その時はね、お前にもね、いつまでもそんなみゝづ切りはさしとらんでね。

女房 さうだす、客引番頭にでも雇つてあげて氣樂に暮させてあげ樣と思つてまんねやさかいに。

亭主 これが叔父甥の切つても切れん肉身の愛情というもんだよ、有難う思うとらんと罰が當るよお前。

甥 へえ、然しなアおつさん（と此時、上手と下手に「まいどありがとうござゐます。こちらは名題の浪花屋でござゐます手前は名題の淡路屋でござゐます。はい七人さんお宿りーい、はい五人さんお泊りーい」等の聲が聞こえる）

亭主 あゝツ、商賣だよお前。

女房 さあえらいこつちや。

亭主 さあ歸つた〳〵、營業防害をするんぢやないよお前。

女房 お前さんがいらんことをごちや〳〵云うさかいに、多勢のお客をみんな他へ取られてしもうたやないか。

甥 すんまへん。

亭主 さあ、歸つた〳〵。（と甥を下手へ突きやる）阿呆につける藥はないよ。

女房 やいとがおますがな。

亭主 はつ〳〵〳〵。（と、上手で「二十人さんお泊りーい」）わ、わらひごとぢやないよ。（と、此時下手から素足に草鞋ばきで、尻端折つて首へ風呂敷包を引つかけた、甚だ風體と人相のよろしくない男がやつて來て、家の中を覗き込む）おい〳〵。

客 何をツ。

女房 ほんまに、大それたことを云うもんや。代官所へ行つてね、共産黨が現れたから、ふんぢばりに來てもらひ度いと云つて來なさい。

亭主　（客の見幕にびくっとしながら）あのね、わしの家を無斷で覗いてもらちや困るよ。

客　此の野郎ッ。

亭主　まあ〳〵、腹も立とうが氣を惡うせん樣にね、泊るんだつたら、他にまだ十何軒といふ、わしの家より小綺麗な旅籠があるからね

客　ぢやあ、手めいの家は泊めねエというのかい。

亭主　いや旅籠ぢやから、客次第によつては泊めんことはないがね。

客　ぢやあ俺ア泊るよ。

亭主　泊る？　おい〳〵〳〵おつさん、そ、それは困るよおいかあさんや、これお前にまかすよ。

女房　まかすてあんた。

亭主　あのねエおつさん、泊るちうてもね、先立つものが金でね。

客　金。

亭主　さうだよ、お前金を持つとるかね。

客　ふざけるない。（と首から風呂敷包を取つて）金なら馬に喰わす程持つてらい。（と、ざく〳〵〳〵と小判を取り出して見せる）

亭主　ありやア〳〵。

女房　あれまア。

亭主　お前、それどこで盜つて來たのかね。

客　何をッ。

亭主　すまん。

客　見損うない、これでも江戸ッ兒だい。

亭主　成程。

客　宵越の金ながら大阪は天滿の天神樣へ願ほどきの筋あつて、ちよいとつまんで來た三百兩。

女房　さ、三百兩。

亭主　お、お前さま、そゝその三百兩、勿體ない、天神さんへたゞで上げてしまうのかね。

客　けち〳〵するない。

亭主　まあ〳〵お這りなさい（と先に立つて這入つて行く）

客　さあ、明日の朝までお前にあづけとかあ、（と、風呂敷包を手渡して）さあ、何はともあれ、一ト風呂あびさしてもらおうぢやねエか

女房　さあ〳〵、どうぞ。（と客を案內して下手へ去る、亭主、風呂敷包を持つたまゝぼかんとして居る、女房出て來る）お父つあん。

亭主　人は見かけによらんもんぢやね。

女房　ほんまにな、あの風體で三百兩なんて、ちよつとわしにも持たしておくれ、まあ、これが三百兩の重たさかいな。（と頬づる）

亭主　それをお前、明日の朝になつたら天滿の天神さんがもらひなさるのぢやが、わしや天神さんに生れたかつたよ。

女房　ほんまにな、わしも天神さんの女房に生れたかつたわいな。

亭主　然し、それを何んとかして、天神さんの代りにこちらへもらう方法はないものかね。

女房　ほんまにさうだすな、これだけの金があつたら。

亭主　女中も四五人雇へるだろうし。

女房　ほんまに障子も張り替へ疊の表も替へられますのにな。

亭主　ふとんもどんすに寢卷もお前、羽二重に出來ると云うものだからね。

女房　さうだすがな。

亭主　離れ座敷もね。

女房　あゝこの三百兩。

亭主　何んとしても天滿の天神さんにわしや渡しともないよ。

女房　さうだすとも〳〵。

亭主　何んとかして、天神さんがころりと、いや、あのお客がころりとまいつてしまうという具合にはいかんもんかね。

女房　なんやつたら、風呂の下をどん〳〵たいたりまひよか。

亭主　石川五右衞門ぢやあるまいしお前、釜焚きの刑に處する譯にもゆかんよ。

女房　あゝツ、お父ツつあんえゝことがおました。

亭主　何かね。

女房　あの客に、うんとみやうがを喰わしたりまひよ。

亭主　みやうがをかね。

女房　へい、みやうがをたべたらけろりと物を忘れると云ひまつしやろ。

亭主　うむ、成程、妙案ぢやね。

女房　風呂上りでのぼせて居るところへ、熱畑に、みやうが汁うんとしぼり込んでな。

亭主　よかろう、酒だけは呑みほうだいが手前の方のサービスでござりまするとねさうだすがな〳〵。

女房　では早速實行に取りかゝつてもらひたいもんぢやね。

亭主　よろしおます。（と急いで下手へ）

女房　わしはね、成功を神に祈つとるからね。（と、風呂敷包を神棚へそなへて合掌する）

亭主　（一升德利と茶碗を持つて下手より出て來て）いて來まつさ。（と上手へ）

女房　みやうが屋の興廢此一戰に在りぢやからね、しつかりとやつてもらわんと困るよ。わしやア神さんにお縋り申しとるよ、然しね、天滿の天神さんだけは聞いてもらつちやあ困るからねなか〳〵これで賴み方がむつかしいよ、あのね神さん天滿天神さんだけは橫を向いて居てもらひ度いんぢやがね。今夜はね、特に大ろ

うそくをはりこむからね。

（と、大きなろうそくを立てるとこの時、上手から女房がそゝくさと走つて來る）

女房　お父ツつあん、

亭主　どうしたというのかね

女房　えらいこつちや。

亭主　えらいことつて、死んでくれたとでもいうのかね

女房　いゝえ、ぐつと一つぺんに一升呑んでしまひよりましてな。

亭主　えゝッ、あのみやうが酒をね。

女房　しいッ。

亭主　まるでお前それぢやアしようぢようの生れ代りぢやないか。

女房　さうだすがな、それであんた、ぐでん〳〵に醉つ拂ひよりましてな。

亭主　お前をくどいたとでもいうのかね。

女房　あほらしい、それであんた、もう今夜を明日の朝と間違ひよりましてな。

亭主　効いたね〳〵。

女房　効くも〳〵あんた、てきめんすぎますがな。

亭主　古人うそを云はずか、それで。

女房　ぼつ〳〵出かけるいうて、もう出て行く支度しよりまんねやがな。

亭主　そ、それは大變だ、愈々神が吾々を見離すか見離さんかの瀬戸ぎわだ。（と此時、客がぐでん〳〵に醉拂つて出て來る）

客　おゝッ、厄介だつたな。

亭主　はい。

客　ぢやアけえるぜ。

女房　へい。

客　（草鞋を履きながら）おやまだすつかり明けきらねエ樣だな。

亭主　はい、何分その。

女房　これお父ツつあん、いえ、それが其の。

亭主　へつ〳〵〳〵。

客　（欠伸をして）あゝいゝ氣持だ。朝起きは三文の得があるつてね。いや、朝早くから起してすまなかつたな。

亭主　め、めつさうもござりません。

客　ぢやあ又來るぜ。

女房　へい。

亭主　そ、それは困るよ。

客　何をッ。

女房　いえ、何んでもおまへんので。

客　あゝ朝酒は廻り過ぎていけねエ、（とふら〳〵しながら）あばよ。（と上手へ去る）

亭主　あばよ。

女房　お父ツつあん。

亭主　しめたッ。

女房　どうだす。

亭主　わしやお前を見直したよ。

女房　まあ三百兩。（と神棚から風呂敷包を取つて抱きしめる）

亭主　三百兩〳〵。（と合掌する、と、此時泡を喰つて客が駈け戻つて來て）

客　おいッ、（と、其れを奪つて、風の樣に去つて行く）

亭主　呀ッ。

女房　泥棒ッ。

亭主　しいッ。

女房　しようもない、こんなことやつたら、高い酒を一升も呑ますねやおまへなんだ。

亭主　こらなんちうことかね

女房　みやうがなんて何んにも効くもんやおまへんな。

亭主　いや、効きよつたよ、あべこべにわし等の方へ効きよつたよ。

女房　ほんまに、さう云へばさうだすな、茶代どころか、風呂賃ももらはんと、やういひまへんわ。

亭主　なアかあさんや、やつぱり人間何んぢやね、持つて生れた役目柄相應の仕事に精を出して働かにやアうそだよ。

女房　さうだすな。

亭主　鵜の眞似する鴉、水に溺れるとかや、殘念ながら、わしや、甥の馬鹿野郎に負けたよ。

—幕—

同舟近詠

松山　前田五健

島の子のいさり火だけで父と知り
浪音も松風も馴れ島に住み
餘生ともこれからだとも歳おもふ
雲のいろ太古のまゝの雲のいろ
三日月の穂さきへ腰を掛けたろか
一列へ驛悠々と窓をあけ
年寄へらしい扱ひ氣に入らず

兵庫縣御影町　長崎柳秀

チンドン屋雨では困る傘をさし
愛人の母には男よくつかへ
儲かりますかとは親がゝり何を云ふ
想ひ出を妻にあかして馬鹿にされ
徒食して親子心中を寒く讀み

仁川　池田可宵

皆外へ出て頂戴と布團綿
その頃の熟練工のなれの果て

金澤　安川久留美

箸立に割箸のない水入らず
母が來て舊曆をきく薄月夜
雅味のある念須を割つた愚か妻

神戸　潮田明坊

御家流讀めず家寶のまゝで持ち
舊友の君とあなたの差で出遲ひ
反撃に出づる決意の草いきれ
お人好し象の目付で笑ひかけ
糟糠の妻には柄が派手に過ぎ
棚經は追ひつくやうに上げはじめ

奈良縣　嶋田翠峯

間引き菜を揃へて母の眼がかすみ

獨逸語譯四句

不識老人

蔣介石語は排斥する。汪兆銘語は奬勵すると言つた人がある。そこ迄徹底せんと翼贊運動にはならんのかもしれぬ。英語を廢し獨逸語を課した中學もあると聞く。ある川柳誌に、今後は一字たりとも橫文字を揭載する事罷りならぬと威丈高になつてゐたのを讀ませられた。英譯川柳に關聯し怒鳴つてゐたのヂヤ。「川柳雜誌」（四月號）のフローレンツ博士―「日本文學史」中―の、古川柳六句は獨逸語譯だから、白晝萬年筆を振つても叱られはしないが、實はコノ老人、訛の多い日本言葉の外は悉く不識。‖ア、日は暮れてしまつたワイ。ヂヤがな。一喝に參ずして而も禪味ある者は、禪敎の玄機を悟り、一字も識らずして詩意ある者は、詩家の眞趣を得といふのだ。萬事この意氣で自惚れ丈けは旺盛なもの。笑はゞ笑へ。ハハハ……。獨逸語譯された六句は

（一）**とむらひは田圃ときいて親仁ゆき**
大間抜戒名忘れ南無親仁
（二）**坊主になつて隱居する**
棕梠箒
（四）**島原通ひ貝原も不養生**
（五）**居候三杯目にはそつと出し**
石塔の赤い信女が又孕み
（六）**全體、斯る句を‖通り句二ツ‖何人が、博士に提供紹介したものであらうか。詩壇の名譽を毀けると同時に「日本文學史」の價値にさへ影響を及ぼす憂なしとせず。其罪や輕るからず、洵にすまんわけヂヤ。**

(1)
Vernehmend, das Begräbnis
Finde in Tambo statt,
Geht der Vater selbst.

極端に直譯されてあるから、一讀二讀、その意味はわからなからう。假りに若し大學の試驗問題としたならば、完全な及第者は乏しからうと思はせらるゝ程、江戸時代の地理及風習に曉通せねば、理解し得ないから感興などひくまい長い註釋を要するものは採用して勞多く効少しだ。「田圃」は「中田圃」の事。淺草田圃の一部。吉原行の拔け道だから古句は殆んど皆兩所を結合させて居る。尤も山谷への葬式も通りはする。「鷲と桶巒と無常の中田圃」などと、鷲と巒が吉原行、桶と無常が山谷の葬式と振分けて居る如く判りはするが、「田圃」は誤りで「弔ひが山谷と聞て親仁行き」が、本當の古句。山谷と云へば寺町だ。此種の作で「山谷」と、はつきり言つたものが他にないので、コノ老人のボケ頭にも記憶があるのヂヤ。

(2)
Den Totennamen (des Vaters)
Vergass der Tropf und betet:
"Bratias, Alter!"

飜譯には隨分難義な句だと思ふ「大間拔」「南無親仁」の含蓄。―輕味、滑稽感を漂はせるのに、文字通りに固定性な Tropf (booby) や、大眼目である古人の得意とする手法を、Gratias, alter (graee, ald) では、斷然無理だと感ずる。寧ろ率直に飜譯不可能だと云ひたい位だ。（一）（二）句にある「親仁」などを alter とか der alter (The old man) 以上に複雜な特種の愛稱なのだ。「お袋と大門を出る恥かしさ」が「母親」であつたならあの世界の情趣が滅殺される如くに。戒名 Totennamen (deadname) が基敎其他にもあつて、直に分かるものであるか否やは知らぬ。buddhistischer to tennamen (posthumous buddhist name) とすれば一應判り易すからう。

(6)
Die auf dem Grabstein
Rote fromme Frau ist
Wieder schwanger geworden.

「信女」も亦戒名（法名）の一部を成すもの、普通には死後に於て僧侶が附けはするが、佛法を信受して三歸五戒或は八戒齋を受けたものであるのを、單なる普通名詞的に fromme frau で取扱ひ片附けてしまつたのは誤譯であると思ふ。pious wife 信仰心の厚い敬虔な妻が孕むわけはないのヂヤ shinnyo で可也。外人に此石塔が誰のものであるかゞ譯句から察知し得らるゝだらうか。短詩型に譯する苦心のために、無理がいつて居るのを認めたい。古川柳人は逆修から逆來といふ言葉を工夫して居る。

ボロ切れのこれも再生だつたのか
松江　勝谷山川兒

學歴が出だした君は醉うてゐる
金を貸すまでには行かぬ隣組
女を想ふ睫毛のそよ風よ
古くゐて自尊の強き女かな
長野縣須坂町　高峰柳兒

更生へ長期年賦を背負され
書寢そこ〳〵に半轉職出掛け
銃後美談女自轉車乘り廻し
山口縣　三原狂路

豆腐屋の或日自家用だけつくり
轉業をしたのか來ない屑拾ひ
鈴虫の餌も市場にすてゝなし
父の代までは榮えた提灯屋
秋の花バスの通らぬ道に唉き

銀波樓氏を送る

安川久留美

○

終始一貫新聞人の生活を四十二年間金澤の地に止めて東京へ去る川柳の窪田銀波樓氏は私よりも年齢を超すこと十五、私が十八歳の時川柳に入る導きを與へて下さつた方である。即ち新聞柳壇を日露役後、更に復活せしめたのに、その中へ一番乘りに飛び込んだのが私とそして今は亡き栗山〻天君である。〻天君は早稻田出の皮肉家で、その頃長町七番丁の柳樹の街に質屋ののれんをさげてゐた。私が二十歳の頃母が細々とした質屋の店を開いたから、同業の〻天君と直ぐあふチヤンスが出來、一方趣味の友となつたのである。

○

古い頃は月の坊といふ戲號で川柳をものした窪田氏が銀波樓選で「北國柳壇」を設けた頃は私の柳號も美の坊、——久良伎翁の久を戴いて久流美と改號した頃は、披露の句會を開き、無論いつち先に銀波樓氏を招いて茶菓に「胡桃漬」の甘いのを出したものである、句集「かき松葉」の序文は同氏と井上劍花坊氏へ依頼した。劍花坊氏が序文のあとに、

北國の胡桃に苦い澁い味

といふ句を附け加へて、私の人物評の縮刷版とした川上三太郎君のいつか言はれた如く、「折鶴」のやうにきちんとした銀波樓氏の序文は叮寧に簡單に几帳面に書かれた。私と同氏と三十三年間の交歡には、いゝ記念の一つである。だが儘か三百部刷つた句集「かき松葉」は私の手許に一部も保存してゐない。

○

句集「かき松葉」の他に私は以前俚謠にも趣味をもつた。矢張り北國俚謠欄を紙上にこしらへたので、旺んに投首したものである。俚謠は劇評の號「夢之助」選であつた。その後私が自費で「北國俚謠集」を刊行したそれにも、銀波樓氏の「はしがき」があつた筈である。

死んだナイルス怪我したスミス螢あぶない宙返り
柱曆のけふ一枚がゆれて淋しい秋の風

と、いふ句にも私は俚謠よりも川柳島へ移ると自信したのである。

○

新聞社には長らく社會部長であつた銀波樓氏の作句には隱れた名吟も尠くはないが、大體輕味本位であつた。雜誌「六華」から「礎」更に「百萬石」の創刊時代まで絕えず私の影となつて輕くむちうつて下さつた。銀波樓氏が還曆を過ぐる事四年、森の都を去らるるにつき哀別離苦の感を深うし、その餞けとしては何もない。切に翁の健康を祈つて擱く。

（附）

東京では川柳に理解のある川村花菱氏が特に氏の話相手であるから、芝居に川柳に孫の話に秋の夜の長さも定めて短いものとならう。

銀波樓氏へ

犀川の獻も忘れな海苔の味

（4）

Im häufigen Besuch der "Inselheide"
Ist selbst "Muschelheide"
Unhygienisch.

コノ老人、前揭の句で大學生を落第させようとしたが、此句に於て自らが落第ヂヤ。獨譯を讀むでも意味が判り兼ねる。島原（所の名）と貝原（人の名）との狂句の遊戲的表現を、丁寧に摸倣踏襲し Inselheide（Tslandheath）— Muschelheide（shellheath）としたのでは、愈々以て通じなくなる。勿論これでは unhygienisch（unhygienic）が迷ひ子だ。斯る狂句の採用は根本から誤つて居る。—コノ老人落第してもよい、解釋してみるワイ。「島原」は京都に在る。（四月廿一日に道中をやる。時局下中止は當然だ。あんな馬鹿騷ぎを毎年やるのは教育風敎上イカン）。「貝原」は福岡の金龍寺に墓のある益軒先生を指すのヂヤないかナ。先生は中年京に上り儒學を講究さる。島原通ひの噂が少し傳へられる。有名な「養生訓」は八十四歳の著作なりと。譯句には「不養生」が更に働かず人物が少しも現はれてゐない。失敗ヂヤ。先生始めに損軒と號す。此句を見られたならば地下に苦笑さるゝならんか。

他の二譯句は後日陳べる機會がある。

獨譯は難事業中の難事業だ。フ博士が詩型に譯されて居る御努力には敬意を表したい。有緣の士よ。多々益々御研究を切願する。排斥者につける藥はないのだから。八紘爲宇の大精神は日本文化の接觸面をより擴大するにある。總ての外國語を利用し驅使する實力の涵養が大切であり肝要ヂヤ。

✦ 落語・田能久後日譚 ✦

呑まれの遍路

（其の二）

前田五健

「こりや變つたお遍路さんだ。つまり、呑れの遍路さんじや無いか」

「御夫婦のお心持ちは判るなあ」

「時に、この村の向ふに皿ケ峰と云ふ高い山があるが、そこに何んでも、大きなのが棲むさうな、然し、少しも悪るい事はせず、悪るい事どころか、旱の時は此邊から松山あたりからも雨乞ひにお詣りすると不思議に雨を降らして下さる、まあ有難い蟒様じやもしや、それではあるまいかノウ」

先程からこれ等の話を隅の薄暗いところで壁に凭れながら、うたゝ寝の風で聞いて居た一人の旅僧……突然ギロリと大きな眼を光らした。

「イヤ近頃イ、話をきいた田能久と狸の聞き間違ひ、狸もこうなれば又た肩身が廣い様なものだ。愚僧も一つ功徳の爲めお力をお貸し申さう愚僧は此の山を越へた松山城の下に近い、荏原村に住む金平和尚と申すものだが、畑の川の眷族に……いや何に同門の衆に所用あつて行く途中で御座るが、格別急ぐ用でもない。明日は愚僧がその皿ケ峰へ御案内申さう、此あたりの山なら大抵御案内出來る自信がある、果して、皿ケ峰のが鳥坂峠のソレか、違つて居るか、會へば判る事だ。まゝ愚僧にお任せなさい。ウム田能久と狸とは面白い間違ひだ。報恩不惜身命……かの」

其夜はあけて田能久夫婦と荏原の金平和尚は茨や青芒を分け乍ら皿ケ峰へ登つて居る

「先刻から云ふ通り何も驚く事はない。和尚に任せておきなさい、例へどんな事があつても驚きなさんなよ」

「ソレでも和尚様にそんな事が出來ませうか」

「心配しなさるな、わしも狸……いや田能久御夫婦の心掛けに感じて、必ず法力を以てお手傳致しませうぞ」

路はだん〳〵と嶮しく成る夫婦はヘトヘトに疲れて來たが和尚は平氣で芒でも茨でもヒヨイ〳〵ととび越えて行く

「やつと來ましたわい。こゝが頂上で、此の草原一面が今夜の面會所じや。日も暮れかけた、さあ野宿の用意しやつしやい、わしは、あちらへ行つて居るから……出たらすぐ、やつて來る。こゝがよからふ、ではお休みなされ」

氣輕く云つて和尚は蝙蝠の様に向ふの雜木林へ消えて、しまつた。

「不思議な和尚さんだ、ヒヨッとしたら人間でないかも知れん、まあ、よいワ、どうせ命がけの面會……心はきまつて居る」

日はトップリと暮れた。次第〳〵に更けて行く、愈よお誂へ向きの刻限とは成つた。

「……」

一山俄にザワめき出し、二つの大きな燐光は鏡の如く、四五間先に朦朧と立つ老人の影…あたりは青白い螢いろのホノあかりだ……

「此の山中へ何しに來たツ」

オゝなつかしや其聲こそ、鳥坂峠で聞いた聲……夫婦は草の上を這ひ乍ら、聲の方へ近よつた。

「おなつかしや、うはばみ様ツ」

「やゝツおまへは、あの時の狸ツ」

「まゝ待つて下さい……あ——何から申上げてよいやらあなた様を捜す爲に私等夫婦は四國へんろの旅……」

これから夫婦が交々にお禮やらお詫びやら心の中を打ちわつて、涙乍らに語りますと

「さうか、あの時は俺も、よつぽど忙てゝ居たと見へるワイ」

物凄い蟒笑ひをしながら

「やいツ、今度は逃さぬぞ……」

「どうぞ御存分に、私等夫婦はこれで、サッパリ致しました」

覺悟の上とて夫婦は泰然自若、ほゝゑみさへ浮かべて居る、そしてソロ〳〵帶を解きかける。

「まて待て、こうなれば何も急ぐ事はない、慌てるな、裸にならんでもよい、そのまゝで呑もう……だが、一寸待てよ、どうも合點が行かぬ節がある、おまへ等眞實の人間だらうな」

「今更ら何んで嘘を申しませう、正眞正銘の人間でございます」

「おかしいぞ……人間臭いところもあるが狸臭い、あゝ狸のにほひがする」

「お疑ひ深い蟒様、人間には人間の道があります。嘘も詐りも申しません」

「疑い深いは蛇の常だ。まあ待て、さうあせるな」

しばらく考へて居た蟒の老人。

「田能久……鳥坂峠の時は鬘で化けたと申したな、今度も出來るか、こゝでまあ一度化けて見い、化けられたら狸だから、あの時の一言もある呑まねへ。蟒にも蛇の道は蛇の意地がある、さあ化けろ、化けて見ろ、呑む呑まないは其上の事だッ」

先刻から此の問答中を何所へ行つて居たのか、姿を見せなかつた金平和尚が、ヒョッコリ其の場へ現はれて來た。

「やい、蟒、狸なら、まぬと申したなッ、相違ないか」

「オヤ、此の坊主何所から湧いたのだ」

「何所からでもよいわい、狸なら呑まねへと、間違ひはあるまいな」

「うはゞみの一言、吐いたものに二言はない、呑まねへと云つたら狸なら呑まねへ」

「よろしい、化けてやる、何んでも注文せい」

和尚が消へたと思ふ途端……水も滴る振袖姿の娘三人……アツト驚く蟒老人を、ながし眼に、ニツコリしたと思へば、苦むす石地藏三體……忽ち又た變る、大蛞蝓三匹……

驚いた蟒……顏色を變へて

「モ、もうよい、よしてくれ、あゝ吃驚させやがる、なめくじ、なんて、いたずら、するない」

「どうだ、判つたか」

「判つた判つた、鮮やかなものだ、俺れの眼力に違ひなく、やつぱりおまへ等は狸だしかし感心したのは化け振りだけでない、四國遍路と云ひ和尚と申し、敬神敬佛の修行は氣に入つた、錬成の容易でない事も判つた、それに、田能久の住居に、俺れを祀つてゐると云ふのも、報恩感謝の美しい事だ……實は俺も鳥坂峠時代の俺ではない、あれから前非後悔、相當の苦勞をして修行もし、悟りもした、悪事は一切やめにして、人の爲め世の爲に陰ながら、つくして居る次第だ、今は人間様から山の龍神として祀られ、小さい乍ら祠も在る、今迄の事は水に流し、つまり舊體制觀念は捨てゝ、仲よくしようではないか」

「さう話が判ればお互に幸せだ、世の中に無駄はない……なあ田能久さん、これも信心のお蔭ですぞ」

「あゝ有難い事です、呑まれの遍路と覺悟をして居りましたに、蟒様は龍神様に御出世……全く神様や佛様のお蔭さまで御座います、それにつけても和尚様も、たゞの和尚さまとは思へませぬが、もしやお狸様では……」

「その通り、わしは一寸近國にまで知られて居る荏原の金平狸じや、年功三百年、相當の苦勞も修業もして居る、そなた等夫婦の正直と信心にうたれ、聊かお手傳ひ申した迄だが、考へて見れば歸一同心、蟒どのも出來たお方だわい」

「さう、ほめられると恥かしい、これを御緣に仲よくして、お互に世の爲めに、つくさうではないか……それから、わし等の仲間へ觸れを出し四國の狸は呑んだり害せぬ樣に致さう、さうすれば、四國狸の繁榮だ、後ち〳〵にはお國の爲めに役立つだらう」

「いや有難い、狸傳說も、つきぬ譯だ」

「話はつきぬ、モウ夜明けにも近い、田能久殿、金平どの、さらばじや……」

其の翌夜の麓寺での騒ぎは大したもの、田能久夫婦は、お手のもの、昔とつた杵柄の旅役者時代に返つて藝づくし阿波淨るりは勿論の事、トンボ返りまでする賑やかさ、金平和尚もまけて居ず、眷族を呼び集めて、御代萬歲の腹つゝみ、田能久の妻が彈き出す三味線は三十三間堂のきやりから、堀川の猿まわしになるジヤズ騒ぎ、序でに日和も見てやろと狸が浮かれ出す、四十六番札所を淨るり寺と云ふのは、これから始めたと云ふが、これは嘘らしい。

尙、皿ケ峰へもお供物を忘れる田能久長者でない、あれか、これかと考へた末、贈つたのが雞卵と味噌汁、うはばみ公、ニヤリと笑つて

「これで、タバコのヤニがとれる……」（終）

（カットは凡生）

川雜投句用箋
一冊十五錢・送料三錢
切手代用可

41(2)516

隨筆

本因坊の風貌

福田山雨樓

この九月十日東京日本棋院において、新制度による第一期本因坊繰承式が擧行され、三十三歳の俊鋭關山利一六段に對し晴れの榮位が贈られたのである。午後からその日本棋院に於て高段棋士が一般出席者に對し、指導碁を打つて下さると云ふので自分も出掛けて見た。關山本因坊を初め木谷、吳、橋本、小野田各七段が街の愛棋家に對し、極めて親切に教授されてゐた。自分はおそる〳〵本因坊の打つてゐられる席近くに侍して、飽かず拜見したのである。ヂット本因坊の風丰馨咳に接して見ると自分には何かしら川柳の本質に迫るものを感じ、嬉しい胸のときめきを禁じ得なかつた。茲で自分に關山さんと呼ぶことを許して頂きたい。自分の見た關山さんは自分の親戚の農家水内五六の若い頃にそつくりであつた。色淺黒く五分刈をのばした無造作な頭、土に親んでゐるやうな皮膚の燒けた手、一寸シミのある紋付を着た衣服は一手毎に皺を見せる。まるで田舍の兄貴が番臺將棋を指してゐる物腰であつた。時々考へ込む顔の筋肉には神經質な深い皺が額や口の邊りに刻まれる。あまり愛想のある顔ではなかつた。その言葉つきも自信には滿ちてゐたが濁つた聲であつた。行きづりに會つてこの人が本因坊かと、おそらく大抵の人は氣付くまいと思はれるやうなまあ言つて見れば地味なわびしい姿であつた。一介の市井人であつた。健康とても決して秀れた逞しさは感じられなかつた。自分にはどうしても若き日の水内五六としか感じられなかつた。しかもこの眞正眞銘の關山さんは、過去二ケ年の血戰において實力を以て遂に本因坊を圍ひとつたのである。その卓越した棋力、逞しい精神力とそは本因坊獲得の素因であつたことと思ふが、その風丰や身邊のことは本因坊と何等の緣由もないのである。こゝが非常に面白いと思ふ。本因坊と云へば手も屆かない非常に高いところにある、棋界最高の存在であると云ふ氣持がするのに、當の本因坊は一向に高ぶらない。平民的（この言葉はチトおかしいが）なものである。飽くまで素の關山さんとして平然たるものである。さう云つた氣持が川柳をぢかに感ぜられてとても嬉しかつた。

籠の中の花

濱田久米雄

トマト、茄子の進出で、今年も恒例によつて朝顏を植えたものゝ日當りのよいところはあてがつて貰へず、日當りの比較的よい糸瓜の橫に、五六本といふ慘めな存在をつゞけてゐた。

梅雨がすみ、大掃除がすんだ時

募集句 一路集

滿員

柳路選

滿員の中で白衣へゆづる席　葉光
滿員の舞臺靜かに幕が降り　靜波
滿員車笑はす人が押されてゐ　鮎美
滿員のふと西成線の事思ひ　丘葦
滿員車みんな默つてゆれてゐる　眞理子
滿員へ看板だけを見てかへり　カズヱ
滿員車汗眞直ぐに落ちて來る　香林坊
滿員へ明日を約束して別れ　小樓
乘るどころか降りも出來ぬ滿員車　臥牛
滿員の向ふも顏でお辭儀をし　正柳
體臭に滿員のバス窓を開け　八重
も一度確めて呼ぶ滿員車　不二
滿員へきゝわけのない子を叱り　綠葉
滿員のバスのガラスにあたる雨　吐空
滿員車武運長久旗の數　鷄城
滿員の映畫館からぽつと出る　治男
つり革へ腕が重さなる滿員車　春童
滿員の食堂に待つ二人連れ　呆人
どしや降りに滿員のバスやつと來る　石鹿
滿員とすげなく言はれあと戻り　透木
滿員にすねて動かぬ木炭車　路村
大陸の夢も乘せてる滿員車　藤樓
滿員へすまぬ手荷物提げて乘り　一葉
延着の滿員だつた汗を拭き　吾平
滿員の今宵稻荷の灯が明い　進
乘せるだけ乘せて車掌は手をあげる　抱逸
ニュース館帽子と頭へ背伸する　紅芽子
滿員ですからとあつさり斷はられ　曉明
滿員に割引券がフイになり　宗男
一列車遲らす話若夫婦　同
白靴を氣にしてバスに乘り遲れ　みづほ
五六臺待つて乘り込む通勤車　同
（佳）滿員の連絡船へ陽がおちる　鮎美
（佳）滿員へ這入れぬ客がまだ續き　詩朗
（佳）滿員へ妻の小さいのが目立ち　牛步
（佳）滿員に押すな〳〵と押してくる　美奈子
（佳）代用食提げて滿員車に搖られ　みづほ
（佳）つめられるだけつめられて最終バスは出る　カズヱ
（佳）滿員の發車へ無理な扉が閉り　駒志希
（佳）滿員へ一升壜の手が重し　千斗彌生
（佳）滿員へかるくあしらふバスガール　石鹿
（佳）滿員へリュクサックに割り込まれ　天秀
（佳）滿員へ來ねばよかつた汗を拭き　須惠夫
（佳）滿員に慣れた車掌の聲であり　快哉
（佳）滿員へ車掌はみ出たまゝの聲　初舟
（佳）警笛をうつかり踏んだ滿員車　同
（佳）滿員のバスへ橫から抱き込まれ　柳路
（軸）食堂車喰べて居るのへ順を待ち　曉明

空壜

豆秋選

空壜もつゝんで歸るピクニック　曉明
空壜へ五合拜んで買うて來る　宗男
空壜の淋しく並ぶバーの棚　葉光
空壜をさげて順番待つてゐる　酉生
空壜を忘れた患者は後になり　紅芽子
宗右衞門町の晝空壜は積み出され　宗男
空壜を虎の子の樣に仕舞ふなり　鮎美
空壜は沖の方から流れ來る　和坊
空壜をながめ禁酒の淋しそう　治男
　　早鐘

軒にかけたまゝで忘れられてゐた大きな果物籠に糸瓜が先づ手をつけた。ついで朝顔の中の一本が、へちまの蔓をつたつて絡えざる努力で捲きついて來た。これは千代女の句のやうになつて來たものだ。暫くそのまゝにして置いてやらねばなるまいといふ風流心が解決して其後——十日も經つたであらう朝。何心なく見上げた眼に、いとも殊勝な色で配置の妙も見せて小輪の朝顔が二つ、籠の中で咲いて上げましたよと云はんばかりの顏を見せてゐた。

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ケ月金一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。（川柳講座幹事）

川協の★★★★ページ

★川柳人協會々長麻生路郎氏は九月四日午後五時四十五分、郷土講話〝大阪と川柳〟と題する講演をBKから放送された。又翌五日には日東サービス株式會社に於いて「川柳とはどんなものか」といふ講演をされた。★前號にも書いた窪田銀波樓氏（金澤）の東京進出に際し、八月廿四日同市さいねんにかけて、氏を送る句宴が開催された。出席者は銀波樓、久留美、六葉、森の家、雅樂頭、默々、庄之助、寶泉、岩波の諸氏。★松山の愛媛川柳社では九月十七日川柳忌を開催された。★高峰柳兒氏（長野縣）は八月末日戸隱へ强行軍で旅行された由、「蕎麥畑歩るき疲れた眼に續き」の句を寄せられた。★白牛川柳會（金澤）舊百萬石時代同人の一部と新進作家を網羅して、新たに生れた同會は發會を昔馴染の市內中心の貸席香林堂に開かれたが、去る九月十八日第二回を開き逐次充實した會合となりゆくそうである。★安川久留美氏（金澤）は病氣のため新愛知金澤支局を退社、一ケ月餘を靜養されてゐたそうであるこの程全快されたので近來振はない金澤柳壇のために盡されるとのことである。★酒井うたのかみ氏（金澤）は近來古句研究に沒頭されてゐる由。★蛭子省二氏（光州）は「川柳朝鮮」九月號に「川柳生活科學强化」を執筆されてゐる。★奥津啓一郎氏（京城）は眼の治療のため島根縣へ旅立たれた由。★朝鮮川柳協會仁川支部では八月二十七日、第二回物故川柳家追悼會を營まれた。元川柳雜誌社同人の矢田冷刀氏も物故川柳家の一人である。★山本斗酒氏（横濱）は「川柳道」九月號に「川柳の天地拓く」を執筆。★夕刊大阪の常務取締役主筆であつた福良竹亭翁が九月十三日午前五時に逝去された。行年七十二歲★津田麗月冠氏（京城）が所用で來阪、來社された。★阪神電鐵產報文化部川柳會十月例會が十日午後六時から西宮產報會館で開催される。兼題「母」「十句鮎美選。★警視廳では情報局との連繫の下に文藝同人雜誌の整理に着手したとのことであるから東都の柳誌も近く嚴合整理が行はれるであらう★川雜小郡支部（山口縣）が創立された。長野元一氏が幹事に就任尙發會式は十月六日小郡驛鐵道職員集會所で開催される。

豆ニュース

★全國一せいにバス、タクシー、自家用車からガソリンが消えた。代燃車も手ぶら客は締出し。（九月一日）
★八・一一停止令實施（三日）
★十月一日の興亞奉公日は「戰爭物資動員の日」と決定（九日）
★滿洲事變の十周年記念日（十八日）現在滿洲國を承認してゐる十六ケ國を參考のために掲げておく日本（昭和七・九）ローマ王國（九・四）サルバドル王國（九・五）イタリー（一二・一一）スペイン（一二・一一）ドイツ（一三・一〇）ハンガリー（一四・一）スロバキア（一四・一）リスアニア（一四・八）中華民國（一五・一一）ブルガリア（一六・五）フインランド（一六・五）泰國（一六・八）デンマーク（一六・八）

次いで國民政府を承認した十一ケ國を左に。日本、滿洲國、ドイツ、イタリー、スペイン、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、スロバキヤ、クロアチヤ、デンマーク。

空壜へインクを入れて假事務所
御化粧の壜は空だと知る鏡
訪れる屑屋空壜見逃さず
空壜が生れ變つた愛國機
空壜で百卅億のたしにする
菓子棚に手持ち無沙汰に空いた壜
空壜の一輪差しも生きる色
藥局も空壜御持參などゝあり
店先へ空壜半分ならべとき
壜買も元からで無い手の細さ
空壜がなくてビールもない祭
實績といふ空壜を大事がり
ウインドにせめて空壜出しておき
空壜を上戶はみんな蓄めてゐた
空壜に野菊が薰る占領地
お神水サイダー壜に入れて來る
空壜も捨てゝ歸れぬハイキング
落目でも空壜だけは並べとき

悅夫　同
進　石
初舟　鹿
路村　千斗
藤樓　吾平
天秀　正柳
十四之　呆人
臥牛　洋子
詩朗　彌生
春童　靜波
牛步　小樓
眞理子　曉明
八重　美奈子
香林坊　葉光
みづほ　鷄城
カズヱ　鮎美
抱逸　綠葉
（軸）空壜を貸してもろたり借られたり　豆秋

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

川柳雑誌社主催

川柳忌

九月六日　於　御津八幡宮

九月二十三日は柳祖柄井川柳の百五十三回忌に當るので、弊社では六日午後六時より御津八幡宮で例年の通り柳祖を偲ぶ川柳忌を開催。出席者六十餘名頗ぶる盛會だつた。◆會場の正面床の間には吉田きよし畫伯筆になる柳祖の温顔。不朽洞會員岩崎柳路氏の北支蒙疆風物寫眞三十葉の展觀が會場の空氣を藝術化させる。◆出席の一番槍は大津の石鹿さん、開會に先立つこと二時間前既にその精悍な顔を見せられる。◆竹莊、默平、指洋、小柳子、棊、無煙等の珍らしい顔が散見する。美奈子さん紫津さん等をはじめ、若い女の人が四人も見えた。◆岡山支部幹事、鈴木九坡氏が飄然と姿を見せられる。兼題「波止場」の選者綠雨さんが神經痛で歩行の不自由さを美奈子夫人と令孃靜江さんに助けられて出席。氏の責任感の强さが光る。◆會場が滿員で應接室に逃げ込んだ某人さんと亞鈍さん。◆席題「鯛」の時間が切迫して潮花、紫香、滿潮、石鹿、其他の諸氏が集めて廻つてゐる。「鯛を締切らして頂きます」「鯛有りませんか」「鯛」「エー鯛」と立ての鯛イ……まさかね。◆「柳祖在りし頃」について十數日もかかつて調べられた路郎先生メモ十數枚を持つて壇上に立たれたが時間が逼かつたのと、例のユーモアたつぷりに話された結果グン〳〵カツ飛ばして結末をつけられたが、後でこれは講談にしても實に面白いんだよと談されてゐた。◆この夜の集ひは實に愉快だつた。路郎師を圍んで誰も彼も句作に、講話に雜念を忘れ川柳の三昧境に溶け込んでゐた。フト床の間の柳祖を見上げると滿足の笑をたたへてゐられた。

出席者（順不同）

路郎、石鹿、一鉢、紫香、鷹丸、玲之介、帆船、要兒、不二、和坊、綠雨、美奈子、翠光、流舟、㪽淵、孤蓬、翠芳、潮花、滿潮、千斗、鮎美、治男、青雲、棊、小柳子、小雅子、駒志希、夜王、指洋、博二、寄與史、呆人、水客、水坊、豆秋、紅多呂、無煙、恒明、默平、香林坊、某人、九坡、今雨、八九滿、小松園、かほる、亞鈍、萬的、晴美、春巣、富喜枝、竹莊、一笑、紫洋、籌形、紫津、凡生、アート、葭乃

席題「鯛」　孤蓬選

節分だ赤鯛でも喰べろ　翠芳
鯛々汝まぐろに化けて來い　翠光
四回海の國に生れて食ふ鯛　某人
カロリーの説明もして鯛賣り　夜王
ごりよんさんはてつきんだ鯛ずし　彌生
海面を紫にして鯛逃げ　默平
鯛とは云はず小さいとゝが好き　駒志希
鯛買ふ列に私服の巡査ゐる　潮花
圓滿な夕餉の膳にある鯛　滿潮
鯛燒く隣も鯛燒いてゐる　小松園
逃込んだ港で鯛網にされ　默平
ひとり旅鯛のとれる濱に立ち　鮎美
鯛の子鯨の口をやつと逃げ　恒明
爆撃機鯛の群を見つけたり　水客
地曳網くらげに鯛むせかへり　千斗
鯛網突出た島の影へ來る　紫香
水族館鯛素通りされてゆき　帆船
市場からやつぱり鯛買うてくる　小松園
鯛々と大漁の聲を賣り　和坊
死んでゐる鯛てゝかむものかいな　呆人
佛性の土にこぼれた鯛の眼　鮎美
默々と鯛肥料の釜に落ち　孤蓬

席題「手相」　豆秋選

金のない事も手相屋知つてゐる　八九滿
ひやかしと知つた手相はほめちぎり　棊
金持ちの手相と一ト所だけちがひ　今雨
手相見がある夜自分の手を眺め　九坡
ほめられた手相我が家へ直ぐ歸り　香林坊
手相などみてもの思ふ頃となり　鷹丸
迷へる羊手相ぼち〳〵意見めき　鮎美
今からでも遲くはないと云ふ手相　滿潮
長生をしますと易者顔を上げ　香林坊
手相見て貰ふ男へ雲流る　万的
本當の事にもふれてゐる手相　翠光
手相見屋苦勞のたらぬ掌を握り　棊
掌にドキンとさせる事を云ひ　八九滿
にぎりずしのつりゝ手相を見てもらひ　寄ち史
手相見てお人好しだと言はれたり　駒志希
赤ん坊の手相を本と見比べる　春巣
手相見を困らせてゐるヒステリー　豆秋

席題「川端」　某人選

川端に父よりうまい子の寫生　八九滿
川端へ刑事が二人坐りこみ　紅多呂
川端へ人形の腕が流れつき　孤蓬
川端のこれから村の名が違ひ　寄與史
船頭と來る川端で滑りかけ　かほる
そのまんま川端の家他人が住む　要兒
川端の月が歪んだまゝ別れ　鮎美
川端へ出ると女はよく話し　小松園
川端の柳が覗く舟世帶　千斗
壁の白さを川に映して日が暮れる　万的
洪水のある日川端見直され　九坡
釣竿の數に川端鮒がゐる　晴美
惡人になる夜の川端筋を行く　滿潮
川端を子守は馴れた足でゆき　水客
傳説のある川端の曲りやう　八九滿
川端の舞臺を巡査素通りし　無煙
川端へ今日も來てゐる片輪の子　凡生
川端で男の愚痴を訊いてやり　滿潮
川端へ來るは氣の逢ふ二人なり　紫香
川端へ萬策つきた腰を据ゑ　水客
まぼろしと成る川端の俄か雨　鮎美
折鞄川端へ來て汗を入れ　滿潮
川端でびつくりをさす白鮒　かほる
伊井河合川へ明治の月が出る　某人
生れ直さうと川邊で思ひ付き　同

兼題「波止場」　綠雨選

日本の波止場が見えて首を出し　香林坊
見送つた後は波止場の雨となり　寄與史

結局はなんにも云へぬ波止場なり　八九滿
汽笛ふと波止場の中をざわめかせ　紫香
波止場から何度目かの別れする　今雨
燈臺の灯から波止場が暮れかゝり　不二
太平洋の波止場に立つて腹をたて　美奈子
灯點々それも見えなくなる波止場　亞鈍
死んで來る氣で波止場をば眺めてゐる　鸚丸
スパイの噂波止場の動き見のがす　石鹿
訣れとはべつに鷗を喜ぶ子　孤篷
晴着して波止場で嘘をついて來る　某人
腹の立つ波止場の波のうねりよう　綠葉
棧橋へ胸毛の兄の浴衣がけ　久留美
精神統一波止場の風に吹かれ　同
日本髪波止場の風に立つくし　滿潮
傳馬船いきなり波止場へつきあたり　不二
波止場から仲仕の聲がとどくなり　今雨
旅人の瞳に波止場の空暗し　凡生
封筒を出して波止場で道をきゝ　指洋
萬歲に波止場は動くように見え　鮎美

兼題「落下傘」　路郎選

どうしても勝たねばならぬ落下傘　小柳子
落下傘下は地獄か極樂か　凡生
故郷に似た山河が見える落下傘　水客
落下傘イナゴは逃げるひまもなし　豆秋
パラシュート白くかがやく秋の雲　三郎
自爆する覺悟落下傘つけず　流舟
時ぞ來た愛機よさらば落下傘　駒志希
近代戰空から部隊が降ると云ふ　不二
他人事だから痛快な落下傘　同
落下傘花形と云ふ顏で降り　かほる
落下傘を議論するよりとんで見ろ　水坊
先着と堅い握手の落下傘　默平
落下傘伴奏つきで降りて來る　九坡
落下傘荷物のやうにおとされる　同
生睡をのませて落下傘ひらく　某人

落下傘落した國と手を握り　亞鈍
落下傘春の畑へ降りる也　綠雨
雨落下傘大地ぐん〳〵迫り來る　伯峯
落下傘の歷史開かぬ事だつた　玲之介
同

川雜 松山支部句會（松山）

八月二十八日　於耕一路居　耕一路報

帆の音のカラリカラリと海の朝　勝鳥
奉仕隊朝のラヂオへ鎌を磨ぎ　重役
玄關に夫の辨當子の辨當　拓水
今朝も又遺兒の蚓を買うてやり　盛氣樓
召され行く朝しみ〴〵と子等の顏　勇龍
母達者臺所から朝の音　五健
婚禮をフト聞く朝の魚市場　同
味噌汁は朝寢の客へ二度目の火　大觀
禁酒して馬鹿〳〵しさの瓶の數　五健
酢か酒か瓶は同んなじ色に見せ　綠風
若者の恥は頭を掻いてすみ　同
朝露がきらり空蟬ヒラ〳〵す　雞城
青年の肩へずしりと國任せ　五健
開店のまだ荷造りのまゝの箱　大觀
下駄箱の位置替へて見る大掃除　綠風
箱積んでもう一寸の手を伸ばし　三笑
裏町の本箱となるみかん箱　綠風
玩具箱まかして母は炊きに下り　拓水
マツチ箱カラ〳〵振つて借りて來る　盛氣樓
生きものゝ樣に扱ふ玉子箱　五健
戰場として青年の守る職場　雞城

持駒は飛車が二丁で唄になり　風來子
持駒を聞き徐ろに步兵を成り　俗菩薩
拍子木の音がかすかな風の夜　俗菩薩
拍子木を首に掛けたは戻り道　同
拍子木は出掛けに一つ打つて見る　風來子
これしきの雨で一列動かない　風來子
一列をあきらめかねる程進み　幽香里
一列へ聞き分けのない子が交り　久米雄
重役もたまには作業服召され　月浦
作業服百圓札へボタンかけ　風來子
大聲が地聲になつた作業服　幽香里

川雜 下關支部句會（下關）

半休報

夏服へ丸くにじんだ氷水　九呂平
夏服のつぎにも見せる母性愛　井蛙
容赦なく白服へバス跳ねたがり　九呂平
子澤山夏服上下分けて着せ　潮流
心太式の出世と彼言はず　鯛好坊
行くたびに珍らしくもない心太　房雄
これだけと母は叱つて心太　草路
節米に協力せよと心太　佃煮
三笑心太太町の時計にされて來る　川平
綠風慰問文鄕里の事が良くわかり　正人
拓水小休止又出して見る慰問文　只坊
盛氣樓母からの假名の慰問に目がうるみ　增產へ二百十日も氣を効かせ
五健出產の便り軍馬ものぞいてゐる　東亞
雞城慰問文母病むと書いて消す　麗志
市多樓

後任の今日はズボンに折目立ち　幽香
後任と並んで寫す庭に出る　柳太
後任の渾名の方が先に着き　春巢
後任へ俺の酒まで言ひ繼がれ　嘘川
後任を紋切型に褒めて降り　水客
座布團が一つ殘つてゐる正座　紫津
正座また祕の電話受けに立ち　某人
通知した時間きつちり正座來る　久枝
刈立ての青い頭で正座に來　同
金屏風正座の人は動かない　水客
耳打ちは正座の次へ來て止り　同
シヤンデリヤ正座の眼鏡よく光り　嘘川
正座にはむかぬ陽氣な癖を持ち　同

川雜 今治支部句會（今治）

九月十日　於伊豫貯蓄銀行　文庫報

涙花節眞赤な顏で呼吸をつぎ　鬼外
潮流涙花節仇の壽命が明日へ伸び　金竹
虎造がこゝにも居ます裏長屋　紫陽
佃煮はこげつく一步前の味　鬼外
佃煮にする樣なのが磯で釣れ　文庫
佃煮でかき込んで置く妻の留守　心府
增產の時も役立つモンペ服　文庫
增產へ二百十日も氣を効かせ　金竹
增產へ一坪の庭見のがさず　宵明
稻光りヤンマトンボは何處へ行く　同

川雜 松江支部句會（松江）

八月三日夜　於山川兒居　山川兒報

油虫裸めがけて急降下　都之介
この裸天下御免といふ裸　四希
二合六勺晝辨當は輕く詰め　龍人
二合六勺妻は不足な顏もせず　湖雪
割勘は狸寢入りできいてゐる　浣路

二合六勺今日も間食してしまひ　祥
二合六勺勤勞奉仕の鍬もふり　松江子
ぽんと腹叩いて狸ひきうける　山川兒

川雜 簸川支部句會（島根縣）

九月二日　於八雲居　綠之助報

かげ茶碗合せて母の眼を盗む　明徳
合併のこんな谷間に家があり　凡狗
靖國の櫻ほろ〳〵父歸る　大瑚
廻覧板大事な所が破れてる　華村
合併の決局重役だけ儲け　田鶴緒
おもむろに茶碗を褒めてからのお茶　豐次郎
子の育つ樂しみをもち父老ける　同
廻覧板又かと眼鏡探すなり　綠之助
廻覧板ついでに讀んで呉れと言ふ　同
廻覧板意見も添へて廻すなり　同
さみしさは父の小言に張りがなし　同

川雜 竹原支部句會（廣島縣）

六月十四日　於可笑居　芳郎報

押賣りへ晝寢の夫起される　芳泉
枕蚊帳晝寢の足がのぞいてる　芳郎
おそはれた晝寢女房に起される　可笑
遠雷を晝寢の夢の中に聞き　みづほ
バリカンの手際を見せる日曜日　芳郎
散髪に行く筈だつた話好き　芳泉
散髪屋一服吸うて次を呼び　斗秀
先輩に任せて一座抜けて出る　同
論議した果先輩へ持つて行き　愛鳩
おごらせる氣の先輩を奉り　芳泉
鏡臺へ處女の最後を寫すなり　愛鳩

川雜 豊中支部句會（豊中）

八月二十四日　紫香報

スリツパが亂れて面會謝絶の間　紫香
月面會を古参横目で見て通り　水客
別宅で會へば社長もよくしやべり　紫香
やどり木のいわれ立札讀んで見る　一笑
立札へ糸のついてる蜻蛉來る　綠翠
バス少し道のうねりへかたむけり　紫香
夜道する心算夕陽の驛へ降り　水客
つんぼから大きな聲で返事され　紅多呂
宿の灯のくらさへ海は荒れてゐる　万的
鐵橋で旅の辨當の空を捨て　紅多呂
素昆布の味をおぼえた一人旅　綠翠
大げさに話す男と旅に居る　一笑
雨の旅海岸線は泡だてる　水客
辻の地圖もまだ新らしい新市内　万的
地圖にない渓でキヤンプの綱を張り　紅多呂
腕だけが燒けて小鮒が五つ釣れ　彌之助

川雜 梅田支部句會（大阪）

九月一日　鮎美報

靴下のつぎがきれいな妻の趣味　順之助
純綿といふ靴下のはき心地　多作
アパートの窓靴下と植木鉢　三司
無帽主義靴下の穴氣にならず　同
洗ひ物子の靴下もまじつてゐ　榮坊
素足かと見ちがふ程にうまく履き　芳雄
青春も過ぎて靴下無地になり　秀峰
オールスフ靴下の色の冷やかさ　同
靴下は純綿と云ふたのもしさ　治男
やれ〳〵と云うて靴下ぬぎすてる　鳴玉
まだ穿けるつぎ靴下が有難い　綠葉
靴下のやぶれ下足は見てしまひ　斗風
靴下のやぶれ平氣な自尊心　同
言ひ負けて出て靴下もやぶれてゐ　鮎美
靴下も氣にせず樂譜創られる　同

川雜 尼崎支部句會（尼崎）

八月卅一日　於昭和莊　美知夫報

支那そば屋支那語を云うて一っ賣れ　鮎美
行水へ母と入ってまた入り　知郎
行水のすぐそこからが青田なり　聽松
姑のさし湯に嫁はいたみ入り　美知夫
行水へ集金人の聲たかし　八櫻
差し湯の聲にけされた虫の聲　正路
一汗を流し行水子にゆづり　加久榮
行水に金魚は朱し母とゐる　鮎美
手におへぬ罐詰父に渡される　美知夫
パイ罐の不足一人は汁を飲み　同
牛の繪のある罐詰のあつけなさ　寄與史
罐詰へなんでも食べる箸が寄り　同
分讓地薦がかれたり茂つたり　聽松
分讓地一軒建つてそれつきり　美知夫
きりぎりすが今年はふえた分讓地　同
分讓地なゝめに抜ける市場かご　和郎
分讓地値段を聞いただけになり　加久榮

富士登山への車中句會（八月十六日）

西瓜々々眞赤であつてくれ給ふ　八櫻
送られた西瓜故郷の母が見へ　和郎
餘世淋しく刻み煙草をすうばかり　寄與史
驛辨に飯殘すなと書いてなし　正路

川雜 布哇支部句會（布哇）

七月十八日　於蔦彌居　北海報

難題は解けず盃重くあげ　草一郎
下役は又難題と馴れたもの　同
難題の嵐の中に大東亞　一涙
難題の中に日本嚴と居る　鶯花麗
理不盡の話へ女將肚を決め　同
市民權呉れず米化をせぬと責め　北海
難題を捌く胡坐に坐り替へ　晩翠
難題と知りつゝうける宮仕へ　沙兆
難題を知らない太い腹を持ち　長州
難題を夢にまで見る受驗生　快夢起
難題へ頬杖ついたまゝだまり　友郎
難題は世に英雄を作り上げ　伯樂
難題の月賦滿期へ日延べ乞ひ　羽山
其の返事尙ほ氣に入らぬ姑なり　木公
笑ひ聲淋しく聞いて病んでゐる　友郎
思ふことづば〳〵言つて親しまれ　同
獨り身のよさは勝手な時戻り　一涙
輕ランチ指の運びもタイピスト　晩翠
素晴しい脚が通るよ橋の上　同
金々と言ふな僕等はまだ若い　沙兆
ABの型も選ばず蚊の世界　快夢起
當てにせぬと言ふた子等の稼ぎ高　北海
金魚の子黒いは數に入れられず　岬
時節柄僕も休閑地がほしい　鶯花麗
夢に生き夢を追うてる華かさ　草一郎
日本人の誇りに生きる祖國愛　羽山
青春は棒に振つたが樂隱居　同

川雜 四ツ橋支部句會（大阪）

翠芳報

防空報國一役買つたビルデイング　青雲
ビルデイング初上京の親に見せ　翠渓
何階か讀んで見る氣のビルデイング　夢想
蜂の巣の樣に顔出すビルの晝　美奈子
ビルデイング六階だけが灯がとり　綠雨
獨身で捨てゝ置けない年となり　壽堂
獨身で末を樂しむ苦學なり　秀甫
嫁々とせめられて居る獨身者　翠芳
獨り者米食時間通りに來　美奈子

森野舊藥草園（奈良縣）

藥草も文獻だけで數が減り　朗舟

森野藤助翁（二句）

探藥の近畿の地理に通じて居　綠雨
木像は藥草の見えるとこに坐し　同

雑川 堺支部句會（堺）

角堂報

樞軸へ遠く騒いでる弗の國　一龜
萬國旗樞軸國がよう目立ち　かほる
樞軸はお金でうんと言はぬ國　英太郎
樞軸にアメリカ一人妬いてゐる　昌坊
樞軸の向ふ眼ざし一つなり　角堂
樞軸の心理は分かり切つた事　美奈子
塗り替へる地圖を擴げる樞軸國　綠雨
樞軸の持たない國の底力　神樂
樞軸の巨頭手と手を握り合ひ　詩朗
落下傘風に任した身の行方　英太郎
燃え盡きて愛機よさらば落下傘　八朗
落下傘開かぬ儘に五秒過ぎ　一龜
敵國でデマも氣にせぬ落下傘　同
落下傘見付け警報頻なり　神樂
落下傘後援部隊日本晴れ　同
ピストルを握つて降る落下傘　豆秋
支那の子に見せてやりたい落下傘　詩朗
足先が冷や〳〵とする落下傘　豆秋
銃口の待つてる中へ落下傘　一龜
落下傘祖國の土と違ふなり　美奈子
落下傘部隊身輕に飛び降る　角堂
れんげ草花咲くなり落下傘　豆秋
觀客へ無事に開いた落下傘　八朗
風向きが變たらしい落下傘　同
落下傘案外樂な顔で降り　かほる

雑川 渚支部句會（大阪）

九月七日　みのる報

大洋君を送る

故郷の山が瞼にうかぶ夏　和坊
故郷へ近く栗の實がこぼれ　紫香
故郷もラッパが鳴つて暮れる所　みのる
背の兒も兵隊さんに手を上げて　大洋
兵隊にお國訛りで道とはれ　鏡舟
兵隊の後を尾をふる犬ついてくる　みのる
兵隊さんがゐるからこわくない子供　潮花

雑川 早鐘句會（大牟田）

八月十八日　於早鐘講堂　蝶人報

一命を助けた醫者の折カバン　龜水
妻と子に送り出された折カバン　平人
見ただけで御醫者とわかる折カバン　藤樓
折カバン中に千圓身を縮め　初舟
秘密をも金もまかした折カバン　蝶人
昇給の順も知つてる折カバン　拖逸
講堂の勝手氣儘に出來ぬとこ　さゝを
講堂へ寄つた笑顔のたのもしい　逸茂
工場の覇氣を講堂の内に見る　一葉
講堂の句會諸に邪魔される　蝶人
ひたすらに息子の出世願ふ母　大腹
同窓會出世したのが發起人　吾平
出世した子へ戒めの假名の文　一帆
友情は出世につれてうすくなり　拖逸
轉業の慣れぬ手つきで炭を撰り　迂哺
半轉のお世辭もいらぬハンマ振り　拖逸
轉業の服へ戰鬪帽似合ひ　進
轉業の自信もついた指のタコ　十四之
節電を子供も知つてする早寢　一帆
節電の窓をニコ〳〵のぞく月　扇山
平凡な夫婦の話貯める事　十四之
平凡な事が出來ずに四苦八苦　路村

雑川 大洲支部句會（愛媛縣）

九月五日　於順平居　椋影報

此の次の驛で降りますコンパクト　椋影
重慶の制空權も蔣になし　京司
無花果の青を照した夏の月　可洲
無花果があつて近所の子等が寄り　肱水
増産へ案山子の數も増えました　曉夢
飛行基地敵は一歩も入れぬ腹　順平
新婚は茄子をもぐのも二人して　曉明
無花果へとゞかぬ吾子の手がさわぐ　いわを

雑川 塗青支部句會（大阪）

七月二十八日　於泉州水間寺　謙公報

ブランコの順を待つてる子が二人　あつし
腰かけて立つてブランコ二人乘り　博行
ブランコの上るたんびに海が見え　謙公
ブランコが揺り殘されて暮れかゝり　光路
ブランコは母の慈愛の手にゆれる　久
思出をみんな壞してビルが建ち　一郎
ハイカーへ仁王時勢だナと思ひ　淳一
珠數持てばいつそう淋し寺の鐘　久
化物の出そうな寺で寢つかれず　謙公
山寺を訪へば老僧首を出し　よし子

阪大川柳會（大阪）

八月二十日　利生報

とも知らず友妹を呉れと云ふ　柳秀
妹を後添ひにする不倖　同
兄さんの力になつて嫁きそびれ　同
妹は僕は僕はと兄を眞似　同
妹の映畫のお供つかまつる　桀
妹に孝行たのむ軍事便　春巣
妹がコーラスにゐるラヂオ聞く　同
妹の内職ミシンねだるなり　同
姉さんの行方妹だけが知り　水虹
映畫みるだけが妹の趣味と合ひ　同
妹にも言ひ分がある片身わけ　利生
妹と出れば蜜豆食べさゝれ　同
妹で通つた頃の懐しさ　筑川
穩びんになどと男に弱味あり　柳秀
男子志を立てゝ未だに二階借　同
腹の立つ顔も並んで事務をとり　同
洗濯を氣にして妻の出養生　同
轉業をする日をモデルふと思ひ　春巣
ギブスベッド胸へ御飯をのせて食べ　同
此の扇たれのですかとあほいて見　山彦
カムイ在すか摩周湖の水に襟合せ　同
爆撃の噂我が家振り返り　方正
ノーストッキングうつかり絹と思ひ込み　同
終點の電車最後に下りる我　利生
恩給で食へない二度の勤めなり　同
曲乘りの名人少しづぼらなり　水虹
蔦の窓雲の往來が面白し　同
なほしても〳〵磁石のやうに子供寢る　桀

松阪倶樂部川柳會（大阪）

八月十七日　白面人報

へそくりを出こは亭主云ひ出せず　恒明
へそくりを使ひなさいと國の母　同
へそくりを出させ女房のぐちをきく　同
へそくりを市場の歸り預けて來　同
へそくりの西や東の本願寺　石鹿
倦怠期へそくりと云ふ趣味が出來　同
へそくりで夫の保險かけて置き　同
へそくりの高も長女は知つてゐる　孤逢
へそくりを豆債券に少しかへ　同
家計簿のどこから産んだとも云はず　同
寄附マニアへそくりつきてボクリ逝　同
へそくりも持つて出かける百貨店　同
天引いてあるとは女房氣が付かず　恒明
天引貯金せよと旦那のきつい事　同
めつそうな天引なんか出來まへん　同
子が出來てむりに天引させられる　同
天引がむりであつたと知るせつき　同
宿料を天引にして飲むでゐる　石鹿
ないものと思へど天引多すぎる　同
二次會の割前までも天引か　同
天引と云へば女房も納得し　同
天引の利息もバンカー考へる　孤逢
天引貯金とられた樣にして貯まり　同

天引で返しますよと借りてくる　同
天引へあはれはかなき歩きやう　路郎
天引のこれがボーナスかとおもひ　同

有恒川柳會（大阪）

八月二十八日　寺井鋭々報

臨月も國策といふ顔で往き　青美
女房の腹と比べる腹が往く　波夢造
河豚の腹ふくれぬまゝの哀れなる　同
責任のない男なり太つ腹　萬雷
腹立てた事が寢床でおかしうて　同
慾のない顔で暗算してるなり　同
慾ばりを一寸おどけてごまかして　同
宿題を母にさせとき慾がなし　同
滿ち足りて冥土へまでも慾があり　青美
御佛が口を出したい遺產別け　同
保養の身經濟欄は見ないこと　鋭々
爪の色產業戰士らしい色　萬雷
深爪を氣にして話賓がいらず　同
青々爪もみがいた理髮床　同
爪を切り終るまで玄關に立たゝき　同
櫻貝のやうな爪した女學生　青美
ニコチンの爪が氣になる座敷です　同
紙のよな嬰兒の爪に戀がゝり　同
爪を切りたゞフン〱と聞く話　鋭々

ぎんりん句會（松江）

八月三日　快哉報

空ツぼの水筒のまゝ五里あるき　みたか
翼贊の寫眞國旗は眞中に　早苗
シヤツターへ大眞面目なり母の顔　同
記念寫眞紅一點は斜向き　快哉
內職でなど〻軍需工貯めてゐる　一聲
戰場の夫を想ふ手內職　弦月
組合へ行けば給仕がよく話し　盛雀
徒歩で行く印弁當腰にさげ　要一
國策は組合殖やすことのよう　松江子
紋付を脫いで職人飲み直し　俊治郎
夜警番內職の灯に聲をかけ　同
轉業の希望職人ほのめかせ　嘉夫
拍子木が晝寢をさます紙芝居　同
紙芝居次は隣の村をさし　遥兒
紙芝居錆びた車の上でよし　同
紙芝居笑ひの內に敎へられ　舞吉
出發の朝だ國旗の風もよし　同
コンディションなどに實力かゝわらず　同
出發も歸還も同じ驛であり　四希
演藝會人氣男は初年兵　同
職人を賴りに主人出征し　町紅
紙芝居子が出た跡を掃除する　同
藥などのんだ事なし徒歩通勤　山川兒
紙芝居とん〱ゝんからりこ唄ひ出し　同
歩け〱肩で九月の風を切り　靜朗
職人のゆとり煙草の煙りの輪　同
名優の餘技へ人氣のある畫展　同
實力で來いとけなげな講義錄　快哉
滿員の人を見つめて徒歩でゐる　同

警察病院川柳會（大阪）

八月十九日　正柳報

白靴の汚れ樂しき思出よ　正柳
几帳面は几帳面だけ靴光り　柳郎
轉業の靴の爪先見つめ居り　五郎
ハイヒールはいてもやつと五尺かな　柳一
靴の紐といて座敷を斷られ　道朗
宿舍の子兵隊靴を一寸穿き　包雄
保險屋はまたくるつもり靴をはき　同
サラリーの二分の一の靴をはき　湧三
逢ひにゆく靴とも知らず女中拭き　同
ローヒール娘の腕はたくましい　同
密談議扇風機をばソット止め　文彦
扇風機もう四〇度で俺に吹き　正柳
扇風機パーマネントの塵拂ひ　一考
扇風機今度は嫁女の方に向く　青柳
扇風機それが一かと腰を上げ　正朗
幕合の人のいきれよ扇風機　吉郎
扇風機緣の幅だけ風を出し　河童
扇風機止めよと筆を嚙んで居り　雨聲
扇風機借りる話がそらされる　湧三
扇風機父が歸つて橫取られ　好平
病人には扇風機まで氣を遣ふ　久郎
よい客と見て向け直す扇風機　雨聲
親心なくて濟むのに扇風機　茂一朗
扇風機の下の御客の長話　正柳
扇風機止めて話は本筋へ　吉郎
肝腎のとこ聞き洩す扇風機　路郎

徐州川柳會（徐州）

七月十二日　ひろし報

貸ボート女の聲ですべり出し　雨町
半ズボン長靴下の柄が好き　鶴城
一本のビール冷すに冷藏庫　槐童
半ズボン親子揃つて坂を行き　ひろし
職域に夏を鍛へん半ズボン　爾郎
病み上りビールの泡を見つめてる　紅夢樓

小郡川柳會（山口縣）

八月二十四日　於小郡鐵道倶樂部　岩崎勇記報

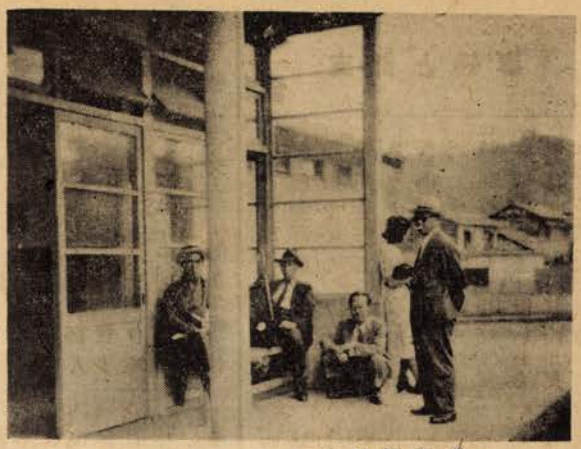
西瓜守風の音にも孤をあげ　城東
のしかゝる樣に切つてる大西瓜　游記
寢ころべば何處か降つてる樣な風　市多樓
颱風の知らせ稻田にそよぐ風　樂天
御手植と聞いて俄かにあらたまり　鯛好坊
歯ブラシをくはへて積木の虫を採り　としを

白牛川柳會（金澤）

七月二十七日　久留美報

町內の畠綺麗な手が揃ひ　友路
秋の灯の明り侘しい夜爪剪る　亂青
嘘から友の姿が夢に消え　清二
モンペイを穿き有閑といはさせず　久留美
空閑地あれが噂の宋美齡　同

非特異性全免疫元
オムニゾンコメット
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症拔萃）
流感、各種肺炎、肋(腹)膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、產褥熱、其他各科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包裝）
二cc五管入　二cc一〇管入
二cc五〇管入　二cc一〇〇管入
一cc一〇管入　一cc五〇管入
發賣元　株式會社黒田藥品商會　大阪・東京
—文献贈呈—



一番町驛にて（松山）
向つて右から前田五健・麻生路郎・高鷲亞鈍・山木耕一路の諸氏（赫堂氏撮影）

柳界展望

催

▼本社川柳忌句會は九月六日午後六時御津八幡宮で開催▼松阪倶樂部麻生路郎川柳講座（九月七日・一日午後一時）▼有恒倶樂部川柳廿講座（九月十一日・二十四日午後五時）▼阪大川柳會（九月十八日午後四時）▼警察病院川柳會（九月十六日午後五時）以上何れも路郎主幹出席。

▼阪神電鐵產報文化部川柳會第二回句會は九月五日西宮產報會舘で開催された。▼川雜廣島支部例會は九月五日開催▼川雜籔川支部句會は九月二日田鶴緒大朗兩氏の歸還勇士を交へ盛大に催された。尙同部では創立拾五周年記念句會を來春開催の由▼小郡川柳會九月例會が十五日に小郡鐵道倶樂部に於いて催された▼川雜大牟田支部は九月十二日夜川柳忌句會を開催した。

消息

▼在蒙疆の岩崎柳路氏（不朽洞會員）は蒙疆新聞社主催の懸賞募集寫眞〃伸びゆく蒙疆〃の審査委員の一人に推され應募者のために同紙上に指導體驗談を發表された。審査の結果、同氏作品はAの部二席に三點、三席に九點。Bの部三席二點、Cの部三席三點、計十七點を入選、萬丈の氣を吐かれた。▼橋本波夢造氏（不朽洞會員）はアキレス筋が切れたので、手術のため九月一日堺病院へ入院された手術後の經過良効、本誌の刊行される頃には退院される筈である。▼石曾根民郎氏（不朽洞會員）は近く川柳句集〃大空〃を不朽洞出版部から刊行されることゝなつた詳細は次號。▼不朽洞會委員長戸倉普天氏は昨年飛行機資金を獻納されたので九月二十日の航空記念日の「全日本號」以下各種献納機の命名式に參列の榮を擔はれた。▼川雜籔川支部の曾田大朗氏（舊姓後藤）は大陸より歸還後、今市市出雲町國民職業補導所に勤務。▼尾崎方正氏（不朽洞會員）は阪大耳鼻科から大遞局病院耳鼻科醫長に榮轉せられた。▼須崎豆秋氏（不朽洞會員）は九月初旬、令弟病氣見舞のため香川縣坂出町へ歸省された。▼森日出夫氏（大阪）は病氣のため轉地されてゐたが最近歸阪されることになつた。▼夷一笑氏（不朽洞會員）の令息は過日頭部に負傷され、九月二十四日阪大に入院された。快癒を祈る。▼奥村丹路氏（不朽洞會員）は近く子寶を得られることになり奥樣が尼崎の產院に入院された。

弔

▼九月十四日森本秋子氏（東京）が逝去された謹みて悼む。

改號

▼小畑自由朗氏（不朽洞會員）は自有浪に。▼恒松湖雪氏（松江）は叮紅に。

正誤

▼九月號三頁上段三十三行目の句は「アッサリとのしと書いてる御寮人」と訂正する▼同號三十五頁第二段三十行目及び寫眞說明にある紀三井寺は三井寺の誤り。

★社の廻覽板

▼川雜小郡支部（山口縣）が新しく設けられた。幹事は長野元一氏。▼不朽洞會委員會が九月十九日午後五時から綿業會舘で催された。出席者は路郎先生戸倉委員長を始め丹路、孤篷、鮎美、豆秋、水客、紫香、春巣、白柳子、石鹿、夜王の諸氏▼川雜廣島支部幹事更迭大森風來子氏が離廣することになつたので、再び濱田久米雄氏が支部幹事として面倒を見ることになつた▼青柳扇子仙氏、玉井彩泡氏は家事の都合により不朽洞會を退會。

★★★★★ 後記 ★★★★★

▼秋だな。どツか歩いて來たいやうな日射しだ。それをジツとこらえて編輯をいそぐ。▼時々、ルーズヴエルトの泣き笑ひの表情が眼に浮んで來る。資金凍結はいゝとしても、その結果が通信杜絶となつては、遠く離れてゐる柳友を淋びしがらせること一ト通りでない。八月一ぱい北米からも、布哇からも一通の手紙すら來ない。九月になつて漸く、これが日本への最後の通信だといふのを入手した。北海氏の通信によると平素筆不精な人たちまでが、ドシ〳〵筆を執つたそうだ。新聞も入手した。資金凍結が生んだ悲喜劇が到る處に演じられたことが報導されてゐる。ルーズヴエルトも女の子のするやうな、いじわるをしないで、男らしく參戰するならしたらいゝだらう。生絲は欲しいが、油はやりたくないなぞとはケチな野郎だ。昔上杉謙信は武田信玄と爭つてはゐたが、敵が鹽に困つてゐると知つたら、鹽を送つてやつた。といふ話もある。世間狹いことは止して浦賀へ開港をせまつたころの事でも思ひ出すがいゝ▼前號の川柳「地獄極樂座談會」が豫想外に好評で、「田舍の坊さんよりも詳しおますな」と素見かされたりした。▼前號の表紙は格別うけがよかつた。本號は又鐵兜の決死隊が壕によつて待機してゐるところだ。▼「川柳塔」の人たちが張切つて作句を續けてゐることはうれしい布哇の一浪氏の句も本號へ載せる分は來たが來月號のは便船の都合でどうなるか判らない。味つて讀んでいただきたい。▼「四人は語る」は月評に代るものとして、少し行き方を變へ主として寫生句に就いて談合つた。丹路が生れたといふ船場の家で丹路と某人と亞鈍と私の四人が何を語るといふことなしに語つたのである。▼私は「吟行地調べ奈良篇」と「解題と例句」の續稿と川柳「戰線名句評釋」の三稿を發表。いづれも句を探し出す厄介な仕事だけに相當に日を潰した。▼小畑自有浪氏の川柳劇「みやうが宿」は隣組に限り、無斷上演を禁ぜずであるが、上演したら一報だけはして欲しい。作者が知つたら作者も張合があつて更に張切つた作品を續々と發表されるだらうしそうすることが文藝報國の一端になれば作者だけのよろこびではあるまいと思ふ。因みに自有浪氏は自由朗氏の改號である。▼九月の私はかなり忙しかつた。放送に、講演に、句會に、執筆に其の他の俗務に、全く晝夜兼行で働きぬいた。十月は九月にも增して忙しいことが豫測されるが川柳のための忙しさは幾ら忙しくても苦にならない。本號はいつもより少し早く諸君の手に入るだらう。（路郎生）

主幹 麻生路郎

賛助員
池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡牛太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　穎原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員
島山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　龜井晟修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文

高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員
橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奧村丹路　岩崎柳路　寺井銳々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉普天　小畑自有浪　古川風竹

前山北海　古川鶯花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　★　北山悟郎　姫田夕鐘　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九満　須崎豆秋　春元紀太　西いわを　後藤青兒　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客

黑川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　小林橙舍　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾桀　多田一波　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住満潮　岩本雀踊子　清水友帆　石野秀雄　清水史路　清水白柳子　西川愁水　中内翠芳

多田市多樓　濱田賢次　森宗男　大森風來子　鈴木九坡　逸見灯竿　石原伯峯　植山九天　夷一笑　鈴木石鹿　渡邊曉童　矢野赫堂　月原宵明　高田抱逸　篠山籌彦　國弘半休　道廣世紀彦　岩崎水虹　岩崎勇記　阿萬萬的　谷川綠風　小林文月　酒井美知夫　飯尾寄與史　小川恒明　野口柳太　濱玲之介　津路紅多呂　河野夜王

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし
函館支部（函館）晟修
梅田支部（大阪）鮎美
簸川支部（島根）綠之助
鳥取支部（鳥取）鐵州
松山支部（松山）耕一路
天王寺支部（大阪）八九満
鶴町支部（大阪）双虎
御池橋支部（大阪）いわを
松江支部（松江）山川兒
大鐵局支部（大阪）柳太

西條支部（愛媛）英賀夫
城南支部（大阪）申仙
今治支部（今治）文庫
川雜光笑會（大阪）里十九
竹原支部（廣島）芳郎
廣島支部（廣島）久米雄
豐中支部（豐中）紫香
下關支部（下關）牛休
北鮮支部（羅津府）美笑
蒙疆支部（張家口）柳路
上海支部（中華）天作

鐵道病院支部（大阪）春巣
渚支部（大阪）みのる
四ツ橋支部（大阪）翠芳
布哇支部（布哇）鶯花麗
堺支部（堺）角堂
岡山支部（岡山）九坡
尼崎支部（尼崎）美知夫
日和佐支部（徳島縣）賢次
川雜早鐘會（大牟田）蝶人
大洲支部（愛媛縣）椋影
小郡支部（山口縣）元一

募集

第十八巻 第十二號課題
十月廿日締切
（十句以内）
食後　奥村丹路選
名人　菊澤小松園選

第十九巻 第一號課題
十一月廿日締切
（十句以内）
沿線　麻生葭乃選
旗　橋本綠雨選

第十九巻 第二號課題
十二月廿日締切
（十句以内）
雪空　岡田某人選
軍事便　高峰柳兒選

毎號募集（毎月五日締切）
近作柳樽（雑吟廿句）麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號
川柳雜誌 第十八巻 第十號
毎月一回一日發行

定價
一冊 金三〇錢（送料一錢）
半ヶ年・六冊 金一圓八十錢（送料六錢）
一ヶ年・十二冊 金三圓六十錢（送料十二錢）
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十六年九月廿五日印刷
昭和十六年十月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所　**川柳雜誌社**
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
振替（大阪）七五〇五〇
電話土佐堀 八三三三番　八一六三番　四一三三番
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社
日本出版文化協會　會員番號　壹壹四〇八五

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本所住氏名

アサヒビール

大日本麥酒株式會社

含有滋味が
もたらす
元氣

愛飲家に
確認さる

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐

紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番 五八〇三番
工場用 同 五八〇四番

安産のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

楢林醫學博士 推奬
片瀬醫學博士 監査

大阪道修町 和田卯助商店

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和十六年九月廿五日印刷納本・昭和十六年十月一日發行

SENRYU ZASSHI
No・213
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

ニキビと美顔水

ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！　ゼヒお勸したい藥です！

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に　是非此藥

東京・大阪
桃谷順天館

第二一三號　川柳雜誌　定價金三〇錢（〒）　送料壹錢